カンザキ

ピンク地底人３号

【登場人物】
緑川　遥（りょう）
坂本　守
神崎純弥
神崎芳雄（よしお）
神崎京子
神崎りさ
神崎ひかる

武田昌美
田中拓次

【舞台】
京都府南区の西側を縫うように流れる敬川。その川にかかる大草橋を西へ降りていくとダンプカーと２トントラックがひしめき合う工場地帯が見えてくる。灰色の煙突からは黄色い煙が立ち上り、赤錆びた鉄の匂いが街の隅々にこびりついている。
この街の中心に居を構える家電配送センター「神崎運送」。
毎朝五時になると全国の工場から様々な種類の家電製品が倉庫に届き、センター内のベルトコンベアーに載せられる。朝七時半には続々と配送員たちがやってきて、事務所でその日の配達伝票を受け取り、家電製品を自前のトラックに積み込んでは京都中に散らばっていく。

舞台は倉庫に隣接するコールセンター兼事務所のプレハブ小屋。

小屋の前にはベンチと起立式灰皿が置いてあり、配送員及び事務員達（彼らの９割は喫煙者である）の憩いの場となっている。舞台下手前にはボロボロのパイプ椅子が雑草の中、転がっている。
ベンチの左手にはむき出しの手洗い場。その上の壁に小さな鏡がかかっている。隣にはカラーボックスが置いてあり、CDラジカセが載っている。右手には事務所へと繋がる扉がある。
小屋の軒下で剥き出しになっているパイプには３本の紐がぶら下がっており、洗濯バサミで雑巾がかかっている。
上手には倉庫へと抜ける道があり、下手の向こう側には配達先から引き取ってきたリサイクル品置き場及び配送員の自家用車専用駐車場がある。
倉庫の裏側には金属工場があり、巨大クレーンによって廃棄物が四角い塊に圧縮されている。その時に火花を伴い発せられる極めて不快で不吉な音が四六時中、小屋前の空気を支配している。

○2019年7月
　20：30

　　ギーガシャン、ギーガシャン……

　　夜。
　　灰色がかった空。
　　京都特有のうだる様な湿気が小屋前に充満している。

兎に角、暑い。

男がゆっくりと下手より入ってくる。
ふと立ち止まり小屋の屋根を見る。
沈黙。
男は軒下に移動するとひょいっとジャンプをして鉄パイプにぶら下がり、背中を向けながら懸垂を始める。
一、二、三、四……
全く疲れを見せる様子もなく黙々と懸垂を繰り返すその姿にこちら側（受け手側）は徐々に不安になってくる……
一体、この男はいつまで懸垂を続ける気なのか……

男　　五、六、七、八……

　　死にたかった

　　ずっとずっと　死にたかった

　　俺は生まれた時に

　　何かを間違えてしまった

　　くそったれ

　　俺はカブトムシになりたかった

　　猛々しい黒い角を　カナブンの腹に　突き立てて

　　黄色く青い血液が　火照った大地に　降り注ぐ

　　神様

　　俺に汗だくの　力を下さい

神崎純弥が上手より入ってくる。
男の背中に、

純弥　　……何回出来るようになった？

男は懸垂をやめて振り向く。
緑川遥（りょう）である。

遥　　何回だと思います？
純弥　　３回。
遥　　もっと。
純弥　　４回。
遥　　もっと。
純弥　　７回。
遥　　８回です。
純弥　　ほんまけ？
遥　　四捨五入したら１０回です。

純弥は笑う。

遥　　純弥さん。褒めて下さい。
純弥　あかん。
遥　　俺のこと、褒めてくれたことないじゃないですか？
純弥　それは主義やから。
遥　　褒められて伸びるやつもいますよ。
純弥　俺は見たことないな。
遥　　見たくないんでしょ？
純弥　そんなに褒められたいんか？
遥　　はい。だって褒められるって認められるって事でしょ？認められたら生きていけるじゃないですか？純弥さん。あのね。俺はありません。褒めれた事。一度も。誰にも。何かやるたびにそうじゃない、そうじゃないって色んな人に言われて生きてきました。あなたならこの気持ち。わかるでしょ？
　沈黙
純弥　……もうここはお前の場所じゃない。
遥　　え？
純弥　そう言うたやろ？
遥　　……
純弥　ここには来るな。
遥　　来ます。俺はここの社員だから。
純弥　頼むわ。
遥　　なんか勘違いしてませんか？俺がここにいるのは別にあなたの事を訴えたいからじゃありません。
純弥　じゃあ何でくんねん！？
遥　　……約束、したじゃないですか？

　遥は転がっている椅子の方へ。
　椅子を立て直しながら、

遥　　不思議な椅子ですね……気ついたらいっつも転がってる……で、立て直すじゃないですか。でもまた次の日なったら転がってる……誰かがわざと俺らの見えへんところで転がしてるんか、それともこの椅子が自分で転がってるんか……でもだとしたら何でですか？何でこの椅子は自分で転がらなあかんねやろ……俺はね、何となくわかるんです。ちょっとこいつ（椅子）に共感するところがある。たぶんこいつ、自分のことを罰してるんです。転がることで何とか自分を保とうとしている……

　遥はベンチに置かれた履歴書を手に取る。

遥　　ジャーン。
純弥　……
遥　　何かわかりますか？そう、履歴書です。もちろん金がないのでタウンワークの後ろについてるペラッペラのやつです。
純弥　……
遥　　ここには来るなって、それ、クビって事ですよね？わかりました。認めます。じゃあ俺、もう一回、面接受けます。一年前、初めて会ったあの時みたいに……お願いします。俺をもう一度ここで働かせて下さい。俺、この会社、好きなんです。

●2018年7月
　12：15

　昼。
　激しい蝉の鳴き声。
　純弥と遥がいる。

純弥　初めまして。ここで副社長やってる神崎純弥です。
遥　　緑川遥です。宜しくお願いします。

純弥　　とりあえずそこ座ってくれる？
遥　　はい。

　遥はベンチに座る。
　純弥は椅子に座って、

純弥　　すまんな。こんなところで待ってもらって。ここだけの話、問題児がおってな、そのクレーム対応の電話で時間取られてもうたんよ。ほんまは事務所の中でやれたらいいんやけど、今、クーラー壊れて、中の暑さがごっついねん。まだここの方がマシやから。
遥　　大丈夫です。
純弥　　それ、履歴書？
遥　　はい。

　と遥は履歴書を純弥に渡す。
　純弥は履歴書を見てから、視線を遥へ戻す。
　遥を見つめる純弥。
　純弥の視線に耐えられなくなり思わず目をそらす遥。
　純弥は再び履歴書に目を落として、

純弥　　……遥（はるか）って漢字で「りょう」って読むんや。珍しいな。
遥　　はい。よく言われます。
純弥　　へぇ。姫路の工場で働いてたん？
遥　　はい。
純弥　　実は俺、元々姫路やねん。小学校の時にこっちに移り住んできて。松浦亜弥って知ってる？
遥　　アイドルの？
純弥　　そうそう。あれ、俺の同級生。昔からめちゃくちゃ可愛かったわ。

　と純弥は笑う。

純弥　　あーそんなんはどうでもいいねん。何で京都に？
遥　　そうですね。色々あって。
純弥　　そこは内緒なんやな。
遥　　内緒っていうか、話すと長くなるというか。
純弥　　いい、いい。無理せんでいいし。
遥　　すいません。
純弥　　配送の仕事は？
遥　　初めてです。
純弥　　結構ハードやで。
遥　　大丈夫です。覚悟決めてきました。
純弥　　へぇ。
遥　　（唐突に強く）お願いします、やらせてください。
純弥　　おお、おお。そんな焦らんでも。働いてもらおうと思ってるよ。
遥　　本当ですか！！
純弥　　もちろんもちろん。いや、便宜上、やっぱりこういう時間は必要やんか。
遥　　あ。
純弥　　落ち着け。大丈夫やから……とりあえずいつも面接の時に言ってることがあんねん。ここの社長、元々うちの親父がやっとったんやけど。最初に作った標語があってな。何があってもそれだけは守ってほしいんよ。ええかな？
遥　　はい。
純弥　　私たちは最良の電気屋を育成し……繰り返して。
遥　　私たちは最良の電気屋を育成し、
純弥　　地域社会に最良のサーヴィスを提供します。
遥　　地域社会に最良のサーヴィスを提供します。

純弥　　続けて言ってみて。
遥　　私たちは最良の電気屋を育成し、地域社会に最良のサーヴィスを提供します。
純弥　　オッケー。これ、いつでも言える様に必ず覚えておいてな。
遥　　はい。

　　するとそこへ上手から小さめの冷蔵庫（チビ冷）を鉄車輪に乗せた田中拓次がやってくる。
　　冷蔵庫は茶色い斑点に覆われ、ドロドロである。

拓次　　お疲れ様です。
純弥　　おーお疲れ。
拓次　　暑いっすね。
純弥　　こんなん続いたらほんまにかなんで。どこやったっけ？
拓次　　朝一（アサイチ）で静。
純弥　　そりゃあたまらんな。
拓次　　面接？
純弥　　おお。（遥に）男前やろ？
拓次　　そんなんじゃないから。
純弥　　三上博史そっくりやろ。俺、三上博史のこと、メタクソ大好きやねんか。あったやん、あのドラマ、何やったって？刑務所の看守のやつ。壊れたの〜お〜フレーンズってやつ。泣いたわ。
拓次　　全くわからないけど。
純弥　　流行ったやん。（遥に）知らん？
遥　　（首を振る）
純弥　　というかそのチビ冷、何？
拓次　　すごいでしょ？新しいの、入れた代わりにリサイクルで引き取って来たんだけど。この斑点、全部、猫の糞（フン）。
純弥　　ええー。
拓次　　俺、初めてですよ。猫屋敷なんて行ったの。おばあちゃんの一人暮らしで家も荒れてて。玄関上がったら上から視線感じるんですよ。それでぱって見上げたら大量の猫に見られてて。思わず、声あげちゃいました。
純弥　　大変やったな。
拓次　　猫も一匹だと可愛いけどいっぱいいるとちょっと怖いね。

　　拓次は鉄車輪を再び持って、

拓次　　（人懐っこい笑顔で）面接、頑張ってな。
遥　　ありがとうございます。

　　拓次は下手へ。
　　下手より、神崎りさ（純弥の妻）と坂本守が入ってくる。
　　守はスーツを着て髪の毛を整髪料で固めている。

拓次　　お疲れ様です。
りさ　　お疲れ様ー。ごめんな。静なんかに飛ばして。
拓次　　いえいえ。事務所のクーラーなんですけど、来週にはつけれると思います。もうちょっと我慢してくださいね。
りさ　　おおきに。

　　拓次は下手へ去る。

純弥　　どこおったん？
りさ　　万代の方です。　　（注：関西を中心に展開されているスーパー）
純弥　　完全に逆やな。
守　　すいません。迷ってたら遅刻してしまって。

純弥　大丈夫大丈夫。初めまして。神崎純弥と申します。ここで副社長やってます。
守　初めまして。坂本守です。
純弥　で、これが嫁のりさ。事務をやってます。
守　それは、はい（知ってます）。
純弥　スーツ？
守　あ。はい。
純弥　別に私服でよかったのに。
守　いえ、一応面接ですし。
純弥　いいね！
りさ　いいでしょ？
純弥　そうや。この子も面接で来てくれた緑川遥君。

遥と守はお互いに小さく会釈をする。

純弥　ちょっと遥君、横に移動してくれる？
遥　え？

遥は初対面にも関わらず下の名前で呼ばれた事に驚いてしまう。

純弥　どないした？
遥　あ、はい。
純弥　で、その隣に坂本君、座って。
守　はい。
純弥　あ、飲み物ないやん。
りさ　取ってきますね。

りさは事務所へ去ろうとする。

純弥　ちょっと待って。
りさ　え。
純弥　あかんあかん。ちょっと待っててな。

純弥は事務所へ去る。

守　緊張すんなー。
りさ　大丈夫大丈夫。

純弥がペットボトルを二つ持って戻ってくる。

純弥　はい。どうぞ。

と守と遥にペットボトルを手渡す。

守　（立ち上がって）すいません。
純弥　あーもう立たなくていいから。ついつい癖でこいつにお茶、持って来させようとしてもうてな。知ってる？ポリティカルコレクトネス。
守　何となくですけど。
純弥　さすがやな。今時、女だからお茶汲みっていうのはまずいと思うわけよ。
りさ　私は別に。
純弥　お前がよくても世界があかんねん。これからはそういったところにも目配りしていかへんと生き残られへん。
守　なるほど。
純弥　こいつと学校一緒なんやって？

守　　そうですね。僕の２個上で。うちの姉がりささんと仲良くて。
りさ　　そうそう。
守　　それで偶然、四条で会いまして……
りさ　　で、久しぶりだしお茶しようって話してたら仕事を探してるって。
守　　お恥ずかしい話で。
純弥　　全然恥ずかしくないよ。
守　　この前の講演、感動しました。
純弥　　この前？
守　　京都産業大学の。
純弥　　ああー来てくれたんや。
守　　「人生は努力だけでは成功しない」
　　「誰と出会うかが最も大切なこと」
　　「夢は実現する」
　　「達成出来たらおめでとう！」
　　「育ててくれた人へは感謝感謝！」

　純弥とりさは声を上げる。

純弥　　自分すごいな。こりゃあ大型ルーキーやね。
守　　すいません。これ、履歴書です。よろしくお願いします。

　守は履歴書を渡す。

純弥　　来たな。我が社始まって以来の大卒。配送の仕事は？
守　　はい。何度か。引っ越しのバイトで。
純弥　　経験者か。助かるわ。

　純弥は一通り履歴書に目を通す。

純弥　　いつから働ける？
守　　え？あ。はい！いつからでも。
純弥　　今日、この後は？
守　　空いてます。
純弥　　研修ってことでちょっとやってみる？
守　　はい！
純弥　　遥君はどう？
遥　　空いてます。
純弥　　（りさに）服、まだあったっけ？
りさ　　二人ともサイズはＭぐらい？
守　　はい。
遥　　はい。
りさ　　あります。

　そこへ下手より神崎芳雄（純弥の弟）がスナック菓子を食べながら入ってくる。

芳雄　　おちかれっす。
　間
芳雄　　今日も暑いな。
純弥　　りさ。
りさ　　はい。
純弥　　ちょっと二人に服、用意してあげて。
りさ　　わかりました。行こ。

守　　失礼します。

　りさ、守、遥は事務所へ去る。

芳雄　　新人？
純弥　　……
芳雄　　かわいいやん。このクッソ暑いのにスーツて。
純弥　　お前な……
芳雄　　（遮って）やだ。やだやだやだ！！もうわかってます。あんさんが言おうとしてることはわかってます。
純弥　　お前、いくつやねん。
芳雄　　３０。
純弥　　もう大人やん。
芳雄　　でた。もう大人やん。でた。大人であることである種のことが許されないあれ。
純弥　　何回言うたら分かんねん。
芳雄　　もうせーへんわ。
純弥　　お前のもうしないは信じられへんねん。
芳雄　　そこは信じてよ。そこ信じてくれへんかったら誰が俺のこと信じてくれんのよ。
純弥　　わかってるやん？信用っていうのは一回無くしたら終わりやねん。それが続いたらどうなる思う？誰もお前のこともう信用せーへんようになるな。
芳雄　　んなこと言うて。大丈夫、わかってます。あんさんはいつだってわいのこと信じてくれおまんねや。
純弥　　お前、全然、俺の話聞いてないやろ？
芳雄　　聞いてるっての。耳ついてるっての。この芳雄君ミミーが世界の全ての音を聞き分けてるっての。
純弥　　食うなや！！人が話してる時にスナック菓子食うなや！！
芳雄　　ちゃうやろが！！そっちがスナック食うてる時に話しかけてきたんやろが。逆やろが。そっち、スナックじゃなくて、スナック、そっちやろが。

　芳雄は指を舐める。

純弥　　舐めんな！！気持ち悪いねん！！
芳雄　　好きやねん。ポテチの塩と指が混じった味。
純弥　　なんで出来へんの？普通に挨拶したら済むだけの話やん？
芳雄　　してるって。
純弥　　普通にしてたらクレームなんてきーひんのよ。
芳雄　　なんか俺っち、ついてなくて。いっつも行く家行く家、クレーマーやねんなぁ。
純弥　　頼むわ。ちゃんとやってくれ。出来へんねやったらもう現場に出るな。
芳雄　　あ。またそれ言うん？
純弥　　お前はたかだかクレームって思ってるかもやけど、そうじゃないねん。お母ちゃんが引退したら俺とお前とでのこの配送会社やっていかなあかんねんから……そろそろ現場以外のことも覚えていかんか？頼むわ。
芳雄　　……俺はいい。てか人足りてないやん。俺が現場に出なきゃ困るやん。
純弥　　……
芳雄　　やろ？大丈夫。ちゃんと挨拶します。機嫌よく、「おはようございます！！」愛想よく「おはようございます！！」どや！！凄いスマイル！！あ。せや。これ、めっちゃうまいで？食べてみ？

　芳雄はそう言いながら再びスナックを食べる。
　りさ、守、遥が事務所から戻ってくる。
　二人は作業服に着替えている。

りさ　　ジャーン。
純弥　　おお。ぴったりやないか。

　そこへ拓次が戻ってきて、

拓次　　お、いいね。二人共。
守　　うす！！
純弥　　拓次、ちょっと待って。
拓次　　はい。
りさ　　会議。いいんですか？
純弥　　え？もうそんな時間け？
りさ　　先、行ってますね。

　　りさは事務所へ去る。

純弥　　二人とも、すまんな。（芳雄に）おい。お前、午後から現場に連れてったって。
芳雄　　え？俺？
純弥　　最初は遥君と拓次のペア、坂本君とお前のペアの二台で行って欲しいねん。午後から西院で一軒家の新築あったやろ。ちょっと一台やと厳しいから。で、それ終わったら、新人二人、トラックチェンジな。
芳雄　　……
純弥　　おい。
芳雄　　わかってるよ。

　　純弥は遥の肩に手を置いて、

純弥　　期待してんで。

　　純弥は去る。

守　　お疲れ様でした！！
遥　　……
拓次　　えっと名前は……
守　　坂本守です！！
拓次　　あ、うん。君じゃなくて。
守　　あ、すいません！！
遥　　緑川遥です。あの、もしよかったら……遥（りょう）って呼んで頂けますか？
拓次　　おお……いいよ。じゃあ遥君。行こうか。
遥　　はい。

　　拓次と遥は上手へ去る。
　　守と芳雄だけが取り残される。

守　　宜しくお願いします！！
芳雄　　（急に）カーッ！！

　　芳雄は手洗い場に唾を吐く。
　　芳雄はCDラジカセの再生ボタンを押す。

芳雄　　８曲目ぇ……

　　音楽が流れ出す。
　　身体を揺らし始める芳雄。

芳雄　　（満面の笑みで）EXILEだったら誰が好き？

●2018年7月
　21：00

その日の夜。
車椅子に乗った神崎京子（純弥と芳雄の母）が夜空に浮かぶ満月を眺めている。
りさが事務所から出てくる。

りさ　来てたんですか。
京子　うん。見て。

と満月に目を向ける。

りさ　すごーい。まんまる。
京子　子供の頃はほんまにウサギが住んでる思てたわ。
りさ　私もです。
京子　今の子はどうなんやろな。
りさ　ニュース見ました？なんか月で生き物の足跡が見つかったみたいですよ。
京子　宇宙人やろか？
りさ　かもしれないですね。かぐや姫宇宙人説っていうのもあるらしいですよ。拓次さんが言ってました。あの人、凄いそういうの好きなんですよ。
京子　拓次が？あの子もああ見えて相当変わってるしな。
りさ　まぁみんな何かしら変わってますよね。
京子　まぁうちからしたらあんたが一番やけどな。
りさ　え？私？
京子　……
りさ　……身体、どうですか？
京子　もう全然大丈夫。まぁこのまま一生、車椅子ってのは考えただけでうんざりやわ。怖いなぁ。脳血栓て。ほんまはあのままぽっくり逝けたら良かったんやけどな。
りさ　そんなこと言わないでください。社長、いなかったらここ、どうするんですか。
京子　純弥と芳雄がおるし大丈夫やろ。
りさ　そんなことないですよ。精神的支柱っていうか、やっぱりそういうのがないと。
京子　あんた、また社長って。
りさ　え？
京子　もうお母さんでええって。
りさ　いやいや。ここは仕事場ですしそういうわけにはいきませんって。
京子　寂しいやん。
りさ　そういう孤独に耐えることも社長の役目でしょ。
京子　（笑って）何それ。

そこへ拓次が上手より鉄車輪にリサイクル品の洗濯機を載せて入ってくる。

拓次　お疲れ様です。
京子　お疲れ様。
拓次　どうですか？お身体。
京子　もう明日からでも働けるで。
拓次　あんまり無理しないでくださいね。
京子　ありがとう。
りさ　どうでした？
拓次　ああ……まぁまぁ。いつも通りって感じ。

上手より鉄車輪に冷風機を載せた守が入ってくる。

拓次　おい！！元気か！？
守　はい！！

　　と返事をするが明らかに消耗している様子。

拓次　　頑張れ。若者。

　　と拓次はにこにこしながら下手へ去る。
　　守はふらふらと下手へ。
　　しかし途中でへたり込んでしまう。

りさ　　ちょっと大丈夫？

　　と駆け寄るりさ。

りさ　　ちゃんと水飲みながらやったの？
守　　大丈夫です。

　　りさは守に肩を貸し、ベンチに座らせる。

りさ　　ちょっと水、取ってきますね。
京子　　うん。

　　とりさは事務所へ去る。

京子　　今日、初めてなん？
守　　はい。
京子　　しんどかったやろ。
守　　大丈夫です。
京子　　お。気骨あるやん。
守　　はい。気骨、あります。
京子　　手、見せてみ？

　　守は手を京子に見せる。

京子　　力入らへんの？
守　　入ります。
京子　　グー握ってみ。

　　守は手を握ろうとするが力が入らない。
　　そこへりさが戻ってきて、

りさ　　（守に）はい。

　　とペットボトルを渡す。

りさ　　自分で持てる？
守　　うん。

　　とは言うものの持てそうにない。
　　りさはペットボトルの蓋を取り、守に飲ませてやる。

京子　　あーあー。赤ちゃんみたいやんか。
守　　（すみませんと言おうとして水を吹き出す）

りさ　　飲んでる時に喋らないで。
守　　すいません。

　守は大げさに喉を鳴らしながら水を飲む。

りさ　　もう大丈夫？
守　　えっと……もう一口。
りさ　　ええ？

　りさは眉間に皺を寄せながら再びペットボトルを口に持っていってやる。

京子　　この子、甘えたやな。
りさ　　君さ、そんなのでやってけんの？
守　　（すみませんと言おうとして再び水を吹き出す）
りさ　　しかも全然学んでないし。
京子　　まぁええやんか。最初は誰でもそやねんから。

　水を飲み終える守。

守　　ありがとうございました。
京子　　あんた、明日は？出勤か？
守　　いえ。明後日から。
京子　　そうか。とりあえず今日は家帰ったら風呂で身体、ほぐすんやで。ちゃんとやらへんと次の日、布団から起き上がられへんしな。
守　　はい。
京子　　続けられそう？
守　　大丈夫です。
京子　　よし。ほな頑張ろう。あと何残ってんの？
守　　冷蔵庫二つに洗濯機、それからテレビ台っす。
京子　　辛くてもここは自分でやるのが大事やで。
守　　うす。

　守は立ち上がろうとする。
　しかし立ち上がれず媚びるような顔で、

守　　……もうちょっと（座ってて）いいすか？

　そこへ上手より遥がブラウン管テレビを載せた鉄車輪を引きずりながら入ってくる。
　遥も守と同様、かなり消耗している様子。
　遥は舞台中央で立ち止まり、膝に両手をつく。
　身体を曲げて呼吸を整える。
　りさが駆けよろうとすると、

京子　　（りさを制して）待って。

　遥は背筋を伸ばし、泣き事一つ言わずに下手へ去る。
　それを見ていた守。対抗心を燃やしたのか、鼻息荒く立ち上がる。
　しかし見るからに頼りない。
　それでも何とか鉄車輪を引きずり、下手へ去る。

りさ　　明後日、もう来ないんじゃないかな。
京子　　まぁ大丈夫やろ。みんな最初はあんなんやったし。重いもん、運んでるうちに力ついてくる。

すると上手から芳雄が現れる。

芳雄　おちかれっすー。今日も芳雄ちゃん、よく頑張りましたー。
京子　あんた、純弥にちゃんと謝ったんか？
芳雄　謝りました謝りました。もう頭下げすぎて地面つくんちゃうかなってぐらい。
京子　ほんまかいな。
芳雄　あいつら、マジで使われへん。
京子　そんなん初めてなんやからしゃーないやろ。
芳雄　俺も甘いわ。次はもっとガツガツ厳しくしたんねん。せやないと戦力ならへん。
京子　ものには順序ってものがあるねんからな。最初からキツくしすぎて辞められたらいつまでも人、育たへんやろ。
芳雄　お母ちゃんはそんなん言うけどな、俺はそれで育ったで。
京子　みんながみんな、そうちゃうやろ？
芳雄　まぁ辞めたら辞めたで俺はかまへんけどな。
りさ　芳雄君。伝票、持ってきたの？
芳雄　持ってきましたよ。
りさ　早く打ち込みして。芳雄君で最後なんだから。それからいい加減、パソコン、覚えてくれない？
芳雄　だって難しいねんもん。
りさ　何度も教えてるじゃん。
芳雄　ええやんか。

下手より純弥が帰ってくる。

りさ　お帰りなさい。
純弥　おお。

芳雄は事務所へ去る。
りさも小さく頭を下げて事務所へ去る。
京子は純弥から逃げようとする。
しかしすぐに車椅子の持ち手を捕えられる。

純弥　お母ちゃん。
京子　おかえり。
純弥　また一人で来たんか？しばらく家におれ言うたやろ。
京子　おばあちゃん扱いせんといて。
純弥　心配してんねん。ごっついトラック、走ってんねんから。
京子　大丈夫やって。ほら。

と京子は車椅子のポケットから自動車用の初心者マークを取り出す。

純弥　どうしたんそれ。
京子　拓次がくれた。
純弥　あいつ。
京子　車椅子初心者。大丈夫。車のライトに反射してピカピカやから。
純弥　つけてないやん。
京子　今、つけた。

と京子は車椅子に貼り付ける。

純弥　（ため息をつく）。
京子　逆やで？あんたがうちの事を心配してるじゃなくてうちがあんたのこと心配してる。

純弥　　あ？
京子　　あんまり無理しなや。
純弥　　してへんわ。
京子　　ほんまに？
純弥　　おお。
京子　　あんたはお父さんちゃうねんからあんたのやり方でやればいいねん。
純弥　　俺と芳雄がちゃんとせーへんと。古株が認めてくれへん。
京子　　あんたはちゃんとしてる。
純弥　　……

　　純弥は車椅子を押す。

京子　　好きやねん。この時間。京都中に散らばった汗の匂いした男どもが帰ってくる。片方だけじゃあかん。行っても戻ってくる。これ、大事な？
純弥　　何カッコつけてんねん。

　　二人は笑う。

純弥　　いい新人、入ってきたわ。
京子　　さっき見たで。どっちの子？
純弥　　……内緒。

　　拓次が戻ってくる。

拓次　　お疲れ様です。
純弥　　おお。お疲れ。
拓次　　（初心者マークを見て）輝いてますね。
京子　　やろ？
純弥　　いつもすまんな。
拓次　　全然。今、事務所の裏口に車椅子でも入れるようにスロープ作ってますから。
京子　　拓次、それは内緒って言うたやん。
拓次　　え？そうでしたっけ？
純弥　　お母ちゃん。そんなんまで拓次に頼んだん？
京子　　頼んでない。拓次が「いりますよね？」って言うからうちは「はい」って。
拓次　　まぁまぁ。いいじゃないですか。
京子　　なー？
拓次　　ねー。
純弥　　……一人で帰ったらあかんで。俺の仕事終わるまでここ、おっときや。
京子　　はーい。

　　純弥は事務所へ去る。

京子　　……帰るわ。
拓次　　悪いですねー。
京子　　悪いねん。お疲れ。
拓次　　お疲れ様です。

　　京子は上手へ去る。
　　拓次は煙草に火をつける。
　　ラジカセのスイッチを入れるとラジオ番組が流れ出す。
　　守がふらふらと下手から戻ってくる。

拓次　坂本君はここまでどうやってきたの？
守　（立ち止まって）自転車です。
拓次　え？家、宇治って言ってなかった？
守　はい。
拓次　遠いなぁ。一時間ぐらい？
守　はい。
拓次　車は持ってないの？
守　持ってないです。
拓次　そっか。金貯まったら、最初に車買えよ？
守　頑張ります。
拓次　まぁまずは来月まで食いつなぐことが優先か。
守　え？
拓次　聞いてない？ここ、給料入るの、働いた月の一ヶ月後なんだよ。だから今月は君に振込はなし。
守　あー。
拓次　大丈夫大丈夫。何とかなるって。あれだったらうちに飯食いに来いよ。
守　いいんですか。
拓次　おお。もう帰っていいよ。あとは俺がやっておくから。
守　え？でも……
拓次　いい、いい。これから自転車だろ？帰り道に事故られでもしたらたまんないからな。今日はよく頑張ったね。気をつけて帰れよ。
守　……
拓次　帰りなさい。
守　……すいません。じゃあお言葉に甘えて。
拓次　明後日も宜しくな。
守　（急に元気になって）お疲れ様です！！

守は上手へ去る。
拓次はベンチに座り、煙草をくゆらす。
上を見上げると満月が拓次を見下ろしている。
ラジオ番組から曲が聞こえ始める。
曲は徳永英明『壊れかけのRadio』

拓次　どんだけ持つかなぁ……

すると事務所から純弥が出てくる。

純弥　あれ？
拓次　帰りましたよ。
純弥　……

純弥はベンチに座る。

拓次　綺麗な月ですねー。こういう時にUFOが飛んできてくれたら最高なんだけど……月を背景に黒い物体がゆらゆら動くんです。ガキの頃に一回だけ見たことあって、誰も信じてくれなかったけど、うちの母親だけはうんうん頷いてくれて……あれは本当に信じてくれたのか、それとも俺をがっかりさせたくなかっただけなのか……
純弥　今、どうしてんの？
拓次　あれ？言ってませんでした？もう今じゃ聞けないかな。
純弥　……うん。
拓次　……なんとかなりますよ。車椅子で済んだことを喜んだほうがいい。
純弥　今日で最後かもって思いながら会話すんのは辛いな。
拓次　考えすぎです。
純弥　でもいつかは来るやろ。

拓次　……

拓次は純弥の肩に手を回す。

拓次　大丈夫。大丈夫だから。
純弥　……

純弥が全身の力を抜き、拓次の肩に頭をのせた瞬間、

暗転。

○2019年7月
20：40

遥　ジャーン。
純弥　……
遥　何かわかりますか？そう、履歴書です。もちろん金がないのでタウンワークの後ろについてるペラッペラのやつです。
純弥　……
遥　ここには来るなって、それ、クビってことですよね？わかりました。認めます。じゃあ俺、もう一回、面接受けます。一年前、初めて会ったあの時みたいに……お願いします。俺をここで働かせて下さい。俺、この会社、好きなんです。

遥は椅子に座って、

遥　「私たちは最良の電気屋を育成し、地域社会に最良のサーヴィスを提供します」
「人生は努力だけでは成功しない」
「誰と出会うかが最も大切なこと」
「夢は実現する」
「達成出来たらおめでとう！」
「育ててくれた人へは感謝感謝！」
純弥　……
遥　どうですか？昔、坂本君がこれ完璧に言ってたの聞いて、悔しかったです。
純弥　しょーもない標語よ。
遥　副社長がそれ言います？
純弥　それ知ってるか？親父が一時期ハマってた自己啓発本の丸パクリやねん。突っ込みどころ満載すぎて何が何やら。最良のサーヴィス？どんだけサーヴィスしてもアホなお客の大量クレーム。夢は実現する？するわけないやん。達成出来たらおめでとうって主語、誰やねん。育ててくれた人へは感謝感謝て！なんで二回言うねん。押し付けがましい。
遥　一個、抜かしましたね。
純弥　あ？
遥　誰と出会うかが最も大切なこと。
純弥　……
遥　軽薄な自己啓発本かもですけど、俺、ちょっと信じてるとこあります。だって俺にとってあなたに出会ったこと、それが一番大切なことやから……
純弥　俺は違う。俺はお前に出会った事がこの人生でも最も最悪な事やねん。
遥　純弥さんってあれですね。思っている事と逆のこと、必ず言いますね。
純弥　俺は本当にそう思ってる。
遥　でも純弥さんだけちゃうか。みんなそうか。思ってる事と逆のことしか言えへんくて、何もかもがダメになっていく。
純弥　お前、そんなポジティブなやつやったけ？暗くて無口な緑川遥はどこへ行ったんや。

遥　　純弥さん。嘘って言ってください！！最も最悪なことって何すか。最悪には最初から最も入ってますよ？腹痛が痛いみたいで超ダセェ。俺と同じように思ってください。もちろん俺だって知ってますよ？この世に相思相愛なんてないことは。いつだって一方通行で、いつだって好きな人はそっぽを向いてる。でもね、言ってください。例えそれが嘘やったとしても。お前との出会いが今まで生きてきて最高のことやったって。言ってくれへんと俺、泣きますよ？
純弥　　……
遥　　服、着替えてきますね。せっかくの初日やねんから。サイズ、ありますよね？

遥は事務所へ去る。
事務所より武田昌美が現れる。
（後にわかる事だが、彼女は病院にいるりさの代わりに赤ん坊のお守りをしている）

昌美　　お疲れ様です。
純弥　　お疲れ様です。
昌美　　戻られてたんですね。
純弥　　今、さっき。
昌美　　そうですか。どうでした？社長のご様子。
純弥　　あまり良くはないみたいです。
昌美　　ああ……
純弥　　すいません。ご心配おかけしまして。
昌美　　いえ、私は別に。
純弥　　情けない事に待合室にいるんが耐えられへんくなってもうて。
昌美　　仕方ありませんよ。
純弥　　しばらくしたらまた病院に戻ります。
昌美　　はい。
純弥　　あ。吸って下さいね。
昌美　　すいません。

昌美はタバコを吸い始める。

純弥　　もうみんな戻ってきましたか？
昌美　　芳雄さんと坂本君のペア以外は。事務所には今、私だけです。
純弥　　そうですか。
昌美　　あの二人、いつも一番最後ですね。当日配達はなるべく俺に回せって芳雄さんが。
純弥　　マジですか？それ、あんまり相手にしなくていいですからね。他の従業員にも満遍なく回してくれたらそれでいいですから。別に社長の息子やからって遠慮せんといてくださいね。
昌美　　はい。
純弥　　もしそれでも回せって言い出したら「俺がそう言った」って言うたって下さい。
昌美　　（笑って）はい。でもどうしてそんなに当日配達したがるんでしょう？
純弥　　育てたいんですよ。坂本のこと。こいつは俺が育てんねんって周りに言ってるみたいで。
昌美　　……へぇ。
純弥　　俺の知る限り初めてなんですよ。自分から芳雄と組みたがった奴って。それがきっと芳雄は嬉しいんでしょうね。
昌美　　……
純弥　　武田さん、ここ来てどれぐらいですか？
昌美　　ちょうど二ヶ月です。
純弥　　慣れましたか？
昌美　　いえ、まだまだ。
純弥　　社長もりさも武田さんの事、褒めてました。
昌美　　ほんまですか？
純弥　　はい。全然ミスせーへんって。
昌美　　そんな事ないです。毎回毎回、間違ってばかりで。他の人にバレへんようにしてるだけです。
純弥　　結構、大変でしょ？コールセンターの事務。

昌美　　はい。今、どのトラックがどの辺で配達してるんか、ちゃんと頭に入れてるつもりなんですけど、やっぱり現場によっては早くなったり遅くなったりしますからね。もうそうなるとぐちゃぐちゃで。前なんか山科で配送してる人に「当配（とうはい）で今すぐ、宝ヶ池お願いします！！」って言うてもうて。
純弥　　そりゃあ間に合わへん。
昌美　　めちゃくちゃ怒られました。
純弥　　まぁ、そうやって覚えていって貰えたら大丈夫なんで。
昌美　　……ほんまに似てませんよね。副社長と芳雄さん。
純弥　　え？
昌美　　色々大変やろうに、誰かに怒ってるん、見たことありません。
純弥　　そんな事ないですよ。常にはらわた煮え繰り返ってます。
昌美　　でも人前には出さないんですね。
純弥　　出してもしゃーないでしょ。
昌美　　……副社長は、芳雄さんみたいに誰かを育てたいって思ったこと、ありますか？
純弥　　……ありません。

　　すると上手より守が現れる。

昌美　　お疲れ様。
守　　……雑巾。ありますか？大きめの……
昌美　　ああ……リサイクル置き場に干してるけど。
守　　……

　　守は下手へ去る。

昌美　　ちょっと見てきますね。

　　純弥はベンチに座り、俯く。
　　病院にいる母親の事を思い出しているのだ。
　　すると事務所から赤ん坊の泣き声。
　　純弥は事務所へ去る。
　　しばらくすると上手より芳雄が入って来て下手へ去る。
　　沈黙。
　　下手より芳雄が守を引きずりながら戻ってくる。
　　守の手にはボロボロのバスタオル。
　　後ろには昌美。
　　盛大にコケる守。

昌美　　ちょっと！！やめてあげてください！！
芳雄　　立て！！こら！！立てや！！
守　　やめてください！！やめてください！！

　　地面で蹲る守。

芳雄　　お前のせいで荷台、染みだらけになるやんけ！！あのトラックは俺のトラック。そうそう買い換えられるもんちゃうねんぞ！！
守　　……
芳雄　　何見てんねん。
昌美　　落ち着いてください。
芳雄　　落ち着いてられるかぁ！！ここで落ち着いたら、どんどん染みが広がっていくやん。
昌美　　……何があったんですか。
芳雄　　あんたには関係ないやろ。事務員は事務員らしく電話対応しとけ。
昌美　　……はい？

芳雄　余計なことに首突っ込むな。後悔すんぞ。
昌美　芳雄さん、おいくつですか？
芳雄　あ？
昌美　１５歳？
芳雄　……どこがやねん！！
昌美　アホみたいに暴れまわって、気弱な子、いじめて。１５歳にしか見えませんよ。
芳雄　３１じゃ！！
昌美　私、あなたみたいな３１歳、見たことありません。
芳雄　見てるやん！！おるやん！！ここに！！芳雄ちゃん！！３１歳！！
昌美　会話にならへんのも１５歳ですね。
芳雄　お前、俺のこと舐めてんのか！！
昌美　舐めてんのはあんたやろが！！うち、５２歳！！年上やねんから敬語使ってんか！！
芳雄　……
昌美　それ以上、坂本君に何かするようやったら警察、呼びますよ？
芳雄　警察？おいおい。そいつの仕事がなってないから先輩が指導しとるだけやろが。
昌美　殴る蹴るは指導とはいいません。
芳雄　ここではそれが指導やねん。今までもそうやってきとんねん。それが嫌なんやったら、あんたが辞めたらええねん。
昌美　……そうやって一体、何人の人、辞めさせてきたんですか？
芳雄　俺が辞めさせたんじゃない。耐えられへんやつが悪い。
昌美　それを世間ではブラック会社って言います。
芳雄　出た！！ブラック会社！！何がブラックじゃ！！なんでもかんでもブラックつけたらええ思てんねやろ！！カッコつけてんちゃうぞ！！ブラック言うていいのはな、仮面ライダーBLACKだけじゃ！！

昌美、呆れる。
事務所から再び大きな泣き声。

昌美　（一瞬だけ事務所を見てから）……大丈夫なんですか？こんなことしてて。社長のところ、行ってあげなくていいんですか？
芳雄　……

芳雄は蹲る守を見て、

芳雄　貸せ！！

と守が持っているバスタオルを取ろうとする。
だがなかなか取れない。

芳雄　握りしめんな！！

守は急にパッとバスタオルを離す。
バランスを崩した芳雄は無様にコケる。
芳雄は上手へ去る。

昌美　大丈夫？
守　すいません。

昌美は守の手を取り、ベンチに座らせる。
守は顔を両手で覆い、堰を切ったように号泣する。
その泣き声は赤ん坊の泣き声と呼応する。

昌美　ごめん。ちょっとチビちゃん、見てくるし。

守　　×××××××！！

　と事務所へ行こうとした昌美に守は後ろから咄嗟に抱きつく。
　興奮した様子で昌美の首筋を嗅ぎ始める守。
　やめろと言いたいが言えない昌美。

守　　……凄い、いい匂いですね。
昌美　　え？
守　　何の香水ですか？
昌美　　何も使ってへんけど。
守　　昔、付き合ってた女の子の匂いと凄い、似てます。
昌美　　……柔軟剤かな？
守　　ダウニー？
昌美　　うん。そうそう。
守　　彼女、使ってました。いや、いいと思います。

　昌美は守を振り切って、

昌美　　坂本君。お願い。もうこれ以上、無理せんといて。
守　　……

　事務所から純弥が戻ってくる。

純弥　　……泣きやめへん。
昌美　　オムツ、確認しました？ミルクは？
純弥　　それが飲んでくれへんくて。
昌美　　わかりました。

　昌美は事務所へ去る。

守　　武田さんのお手伝いしてきます。

　守も事務所へ去る。
　そこへ下手より遥が作業着を着て現れる。
　遥はおもむろに鏡の前へ……

●2018年7月
　07：30

　早朝。
　遥が入社してから一週間後。
　遥は鏡の前で言い聞かせるように、

遥　　うぃっす……マジっすか？冗談でしょ？……昨日の女、最高でした……今度、飯、一緒に行きましょう……お疲れ様です……お疲れす……お疲れした。（声の調子を整えるように）おはようございます。（声の調子を整えるように）おはようございます。（声の調子を整えるように）おはようございます。
　間
遥　　緑川、遥（りょう）です。

　守が上手より入ってくる。

守　　おはよう！！

遥　おはよう。
守　早いね。
遥　うん。
守　俺、朝弱くてさぁ。７時半出勤とかマジ無理ゲーだわ。
遥　……
守　どう？
遥　どうって？
守　一週間、経ったやん。続けられそう？
遥　……うん。
守　マジで？身体、バキバキじゃない？
遥　バキバキ。
守　やんなぁ。はー……これで月１５万やろ？なんかとんでもないとこきちゃったね。実は引越し屋でバイトしてったって嘘やねんか。シクったかもしれない。
遥　……
守　遥君はさ、芳雄さんと組んだ事ある？
遥　ない。
守　そうなんや。俺もちょっとしかないねんけど、言っていい？俺、芳雄さん、苦手だわ。そこら中に唾吐くし、移動中はずっとEXILEやし。しかも同じアルバムを延々、リピートすんねんで。なんやろあれ？全然ええ曲ちゃうのに頭にこびりついてさ、寝ると時もずっと頭に響いてんねんか。マジでやめて欲しい。
遥　……
守　遥君ってさ、人見知り？
遥　え。
守　いいよ。僕に人見知りせんでも。お互い同期やねんからさ、なんていうの、腹割ってさ。
遥　……人見知りっていうか、あんまり得意じゃないねん。人と話すん。
守　それを人見知りって言うんじゃない？
遥　どうやろ。

　そこへ芳雄が下手より入ってくる。

遥守　おはようございます！！
芳雄　おお。

　芳雄は事務所へ去る。

守　やっば！！今日、めっちゃ早いやん。俺、前、怒られたばっかりやねん。トラック洗っとけって。
遥　やっといたよ。
守　え？そうなん？助かる。助かるわ。悪いんやけどさ、もし芳雄さんにその事聞かれたら、俺もやったって事にしといて欲しいねんか。
遥　いいけど。
守　ほんまに？ありがとう。ジュースおごるし。何飲みたいか考えといてな。
遥　……

　芳雄が伝票を持って事務所から出てくる。

芳雄　振り付け、覚えた？
守　……はい。
芳雄　まじかぁ。

　芳雄はラジカセの再生ボタンを押す。
　音楽が流れ出す。
　守は事前にYOU TUBE動画で確認しておいた振り付けを必死に踊る。
　すごく頑張っていることだけは伝わる。

芳雄　いいよ……いいよいいよいいよ！！かは！ごめーん！出ちゃった標準語！！てか俺に標準語出させるぐらいにはええやんええやん！！
守　すいません！！まだ全然ですけど！！
芳雄　ええやんええやん！！
守　すいません！！
芳雄　全然あかんよ。全然あかんけど伝わったねん、お前のハート、伝わったねん。
守　ありがとうございます！！
芳雄　というわけで真打ち、登場ってか。

芳雄は踊りだす。

芳雄　こうや！……ほんでここはこうや！……で、こう！で、こう！こう！こう！どないや！

芳雄は停止ボタンを押す。

芳雄　かっこいい？
守　はい。
芳雄　ありがとう。次は来週な？
守　え？
芳雄　で、踊れるようになったら、ライブ行こで。
守　あ。でも……
芳雄　（急に）カーッ！！

芳雄は唾を吐く。

芳雄　決まりな。ちゃんと覚えてこいよ。覚えてこんかったら殺すからな。

芳雄はベンチに座ってペットボトルを飲む。
（以降、芳雄はチラチラと遥をバカにしたような顔で見ながら守と喋る）

芳雄　坂本君ってさぁ。大卒ってマジ？
守　はい。
芳雄　初やで初。この会社に大卒。
守　らしいですね。
芳雄　りさぽんの紹介で来たんやんな？
守　そうですね。
芳雄　でもさ。他にあらへんかったん？
守　ないことはなかったんですけど、副社長の講演を聞いて。人生は努力だけでは成功しない、誰と出会うかが最も大切なことって言ってて。俺にとって大切な出会いって副社長で。だからここで働いてみようかなって。あとそれから決定的だったのが「夢は実現する」って言葉で。一人の夢への挑戦が会社全体に広がって、達成出来たらおめでとう！育ててくれた人へは「感謝感謝！」って。昔から副社長ってあんな感じなんですか。めっちゃ賢やし。たぶん俺が今まで会ってきた人の中で一番切れるんちゃうかな。
芳雄　てかさ、お前は言ってることわかるんや？なんかな、俺、よくわからへんくて。バカだからっていうのもあるんやけど何か言ってるようで何も言ってない気がするのって俺だけ？なんかな、親父が生きてる時にあの標語作ってから、若い奴らのやる気っていうの？凄いねんか。
守　いやいやいやいや。ちゃんと話聞いてます？めっちゃ簡単な話やないですか？出会いと夢が大事ってことやないすか？え？遥君はわかるやんな？
遥　……
芳雄　（遥に）……え？わかんの？わからへんの？どっち？
遥　……
芳雄　俺さ、お前みたいにうんともすんとも言わへん、モヤシみたいなやつ、いっちゃん嫌いやねんか？

と荒々しく唾を吐く。
遥の腕を掴んで、

芳雄　腕、ほっそー。
遥　……
芳雄　おい。荷積み行くぞ。（遥に）退（の）け。

と必要以上に強く、遥の肩を押す。
蹌踉めく遥。

守　はい。

芳雄と守は上手へ去る。
取り残された遥。
遥の中で、緑川遥（りょう）が揺らぎ始めてしまう。
遥は鏡の前へ。

○2019年7月
20：50

遥　……お疲れ様です……お疲れす……お疲れした。（声の調子を整えるように）おはようございます。（声の調子を整えるように）おはようございます。（声の調子を整えるように）おはようございます。緑川遥です。
純弥　……
遥　変身、終わりです……仮面ライダーみたいにベルト一つで変われたらいいんですけど……こっちは言い聞かすのに大変なんです。まぁ俺、弱いから、ちょっとしたことですぐにブレちゃってその度に落ち込むんですけど……作業服だってね、これは俺にとっての鎧なんです。
純弥　鎧っていうには随分ダサいな。
遥　そう思うなら制服、新しくしたらどうですか？

事務所から赤ん坊の泣き声。

遥　泣いてますねー。
純弥　ああ……
遥　でっかい声。イライラする。
純弥　……
遥　俺、妊婦さんとか赤ん坊って実は嫌いなんですよね。女の象徴って感じで……否が応でも現実に引き戻される。でもあれ？って思うんです。それで女どうこう思う時点で、違うんじゃないかっていうか、それってみんなが俺のこと、男じゃないって勝手に決めつけることと一緒ちゃうんかって……ちんちんついてなきゃ男じゃないって？うっさい！！うっさいうっさいうっさいんじゃ！！ほっとけボケナス！！つけるつけないは俺が決める！！何でお前らに決められなきゃあかんねん！？
純弥　……誰に怒ってんの？
遥　……神様に。
純弥　……神様は、いんのか？
遥　……いますよ。いなきゃこんなことにならへんでしょ。神様が唯一、役に立つのってどんな時だと思います？誰にぶつけたらええかわからへん怒りをぶちまけたい時だけです。もちろん手応えはちっともありません。神様はいつだってだんまりです。返事がないとさらにぶちかましたくなります。返事しろや！！クソ神様！！どうして俺に罰を与えた！？

と夜空に向かって咆哮する遥。

純弥　……

遥　　ほらね。返事ないでしょ？だから仕方なく目の前にいる神崎純弥さんに当たるしかないわけです。

純弥はそんな遥に赤ん坊の将来を重ね合わせてしまう。
遥に背中を向け、事務所を見ながら、

純弥　　……あの子、凄い似てるねん、俺に。普通の親やったら喜ぶんやろうなぁ。せやけど時々目に浮かぶねんか？あの子が成長して俺に「なんで生んだんや！？」って泣き叫ぶ顔が。生まれてさえこんかったらこんな辛い目に合わずに済んだんやって……

遥の目には純弥の背中が小さく、とても小さく見える。

遥　　……可哀想な純弥さん。あなたは怖いんですね。いろんな事が……見てるだけで心が痛みます。赤ん坊のこと、社長のこと、この会社のこと。考えても仕方のないことばかりに翻弄されて身動き取れへんようになってる。
純弥　　……
遥　　俺はね。怖い時はいつだって俺はカブトムシだって！！言い聞かせるんです……バカみたいでしょ？でもいいんです。バカみたいで。誰からも相手にされなくても。カブトムシって思い込んだら何だって出来る気がするんです……知ってました？駐車場の向こうにあるクヌギの木、たまにいるんですよあいつ。もしかしたら今日もいるかもしれない。俺、純弥さんのために取ってきてあげますね……

遥は上手へ去る。
昌美が事務所から出てくる。

昌美　　ミルク、ちょっと熱かったみたいです。少し冷ましたら飲んでくれました、今、坂本君があげてくれてます……なんか意外でした。年の離れた妹がいるんですって。だからよく面倒見たって。赤ちゃんの顔を見てたら随分落ちていてきたみたいです。
純弥　　……そうですか。
昌美　　……何があったか、聞きました。芳雄さんに荷台に閉じ込められたそうです。それでトイレ、我慢出来なくなって……血が混じってるって相当ですよ？いいんですか？
純弥　　後輩の教育はあいつに任せてますんで。
昌美　　それがここのやり方って事？
純弥　　はい。
昌美　　芳雄さんと同じ事、言うんですね。でも、人がいないと会社は成り立ちませんよね。
純弥　　耐えれるやつしかここにはいりません。
昌美　　本当にそれでいいんですか？

純弥は昌美を睨みつける。

純弥　　……
昌美　　すいません。でしゃばったこと言って……あの、坂本君のこと、守ってあげていただけませんか？お願いします。あの子、このままだと壊れちゃいますよ？

●2018年7月
　13：30

車椅子に座っている京子。
項垂れながら立っている遥。
それを見ている芳雄と守。
舞台上手には回収されてきた冷蔵庫（チビ冷）が台車の上に置いてある。

京子　　がっかりしたわ。
遥　　……

（以降、京子の遥への説教が始まるが、実は事故の原因は芳雄にある事も彼女には分かっている。しかし言えない。京子は遥を通し、芳雄を説教している）。

京子　会社の車で突っ込むバカがどこにおんねん。あんた、ここ来てどんぐらい。
遥　一週間です。
京子　２トントラック、運転したことあんの？
遥　初めてです。
京子　じゃあ運転したらあかんわ。
遥　……
京子　何を根拠にいけると思ったん。
遥　……わかりません。
京子　運転っていうのは訓練やから。最初は駐車場から初めて徐々に慣らしていくんよ。今回は大きな事故にならんかったから良かったもののな。あんた、もし人でも撥ねてみ？えらいことやで。
遥　すいません。
京子　すいませんってな。言うんやったら最初から運転したらあかんわ。免許っていうのは配送業者にとって命の次に大事なものやねん。車、運転出来へんかったら仕事ならんやろ。
遥　はい。
京子　芳雄、あんたもあんたやで。何を新人に運転させてんねん。
芳雄　いやそいつがやりたいっていうからさ。俺は仕方なくやね。
京子　だとしてもオッケー出したらあかんやん。そこは何を新人が何言うとんねんでええやんか。
芳雄　何？俺のせい？
京子　後輩の責任はあんたの責任でもあるやろ。
芳雄　違うやん。そいつは俺たちにいいとこ見せたかったんよ。もう運転できます。もう洗濯機設置できます。もうテレビの設定出来ますってさぁ。憧れてるんよ。そんな若者を無下に出来ますか？いや出来ない。

りさが事務所から現れる。

京子　どうやった？
りさ　はい。とりあえず全部、保険会社に任す感じで。なんかちょっと打ち身ぽいんですけど、全然大丈夫とは向こう側も言ってくれて。
京子　今度謝りに行かへんと。
りさ　あ。それなんですけど、全然そういうのはいらないって。
京子　いらん言うても行くのが礼儀やろ。住所聞いた？
りさ　一応。
京子　明日、朝一で伺うって連絡しといてくれんか。純弥はちょっと今日は無理やわ。
りさ　わかりました。電話して段取り組んどきます。

りさは事務所へ去る。

京子　（遥に）いいこと一個もないやろ？トラックの修理代。保険料の値上がり、相手方に謝りにいく時間。あたしも純弥も暇やないねん。（芳雄に）あんたの直るまでしばらくは純弥のトラック貸り。
芳雄　了解でーす。
京子　ちゃんと教育しなさい。
芳雄　してるっつーの。
京子　してへんやろ。
芳雄　別に他の人に任せたらええやん。みんなから慕われてる拓次さんとかさぁ。俺より教えるのが上手い人、いっぱいおるわけやし。
京子　あんたが教えなあかんねん、あんたは部下から尊敬されなあかんねん。
芳雄　何やそれ。まるで他の若手が俺のこと尊敬してへんみたいな言い方やな。
京子　……

すると事務所から拓次が出てくる。

拓次　何よ。この空気……クーラーつけ終わりました。
京子　おおきに。
拓次　芳雄君、またやらかしたの？
芳雄　俺じゃないわ！！
拓次　……そうなの？
京子　拓次。万代、連れて行ってくれるか？
拓次　はい。あ、でも今日は月曜日だからパン、１００円じゃないですよ？
京子　ええから。連れて行って。
拓次　わかりましたー。

京子と拓次は上手へ去る。

芳雄　（遥に）……おい。怒ってんの？
遥　……いえ。
芳雄　顔に出てますけど。
遥　……
芳雄　お前のせいやん？お前のせいやねんからお前が怒られて当然やん。お前がちゃんと冷蔵庫持ってたら俺はイライラせんで済んだし、トラックだって集中して乗れたわけやん？俺、なんか間違ってる？
遥　……
芳雄　まただんまりか。黙って黙って黙って黙って何とかやり過ごして。お前はそうやって生きてきたんやなぁ？
遥　……
芳雄　おい。そのチビ冷、持て。特訓や。

遥は台車の上に置いてある冷蔵庫を一人で持とうとする。
守は手伝おうとするが、

芳雄　坂本、誰が手伝え言うた？
守　……

遥は一人で冷蔵庫を持つ。

芳雄　俺、今からシッコしてくるし。帰ってくるまで持っとけ。ええか？絶対下ろすなよ？もし誰か来ても特訓やって言えよ？

芳雄はわざわざ台車を持って下手へ去る。

守　ほんまに無茶苦茶やな。突っ込んだの、あの人やん？
遥　……
守　俺、どうしたらええと思う？やっぱり本当の事、社長か副社長に言った方がええかな？俺的には言った方がいい思うねん。でも遥君がやめてくれ言うなら言わへんし。俺はどっちでもいいねん。遥君の意思を尊重するよ。まぁただちょっと困るんがチクったのが俺やってバレた時やねんけど、でも大丈夫。俺も遥君も間違ってへんし。それはもう絶対やから。
遥　……
守　……無理せんほうがいいよ。大丈夫。俺、ちゃんとあっち（芳雄が去った方）見てるから。戻ってきたら合図するし。そしたら持ったらええねん。な？そうしよ？

と守は言うが遥は下ろすつもりはない。

守　遥君。まともに相手にしたらあかんよ。

遥、耐えている。

しかし限界がきたのか、冷蔵庫を下ろしてしまう。
下手から唾を吐く音。

守　（下手を見て）あ、戻ってきた！！持って！！持って！！

しかし遥は持てない。
芳雄が戻ってくる。

芳雄　……誰が置いていいって言った？
遥　……すいません。
芳雄　お前、新築の家でもしんどい言うて、冷蔵庫、落とすん？
遥　……
芳雄　それ、チビ冷やで？買うのなんてアホみたいな大学生だけやわ。うちのメインは２００リットル、３００リットルの冷蔵庫。ドラム式の洗濯機、大型テレビ。なぁ？
守　違うんです。300の冷蔵庫、落としたの、あれ、俺のせいです。俺が汗で手、滑らして。
芳雄　そもそもこいつが、持てへんからお前が手伝ったんやろ？
守　それはそうなんですけど。
芳雄　だいたい、基本、配送は２人やねん。お前らが新人やから今、３人で乗っとんねん。（遥に）おい、ちょっとそっち持て。

と言いながら冷蔵庫の頭を持つ。
足側を持つ遥。

芳雄　いいか？仮にこれを今日、お前が落とした300の冷蔵庫とするわな。ほら、坂本、お前も持てや。
守　はい。

と守は遥を手伝う形で足側を持つ。
３人は冷蔵庫を持ちながら移動する。

芳雄　えっちらおっちら。ほら、お前らも言え。えっちらおっちら。
守　……えっちらおっちら。
芳雄　えっちらおっちら。
守　えっちらおっちら。

そこへりさが事務所から出てくる。

りさ　……何してんの？
芳雄　何これ！？
守　すいません！！
芳雄　今日、俺らがやってたのこれやで！？こんなかっこ悪い配送見たことある？俺はない。ないよ。今まで一回もないよ！！置け！！

３人は冷蔵庫を置く。

芳雄　アスリートやねんか！？俺らは。わかる？オリンピックに出てるやつや。テレビで見たことあるやろ。どんだけカッコよく重いもん、運べるかが勝負やねん！！それを持てへんってどういう事？走れへんアスリートってアスリートか？泳がれへんやつは？円盤投げれへんやつは？槍投げれへんやつは？わかる？持てて当たり前。そこがスタート地点。そこにも立てへんやつに配送なんて出来る訳ないやん！？

あまりにも無茶苦茶で滑稽な物言いだが誰も何も言えない。

芳雄　りさ、もう俺をこいつと組ましてくれんな。頼むわ。こいつ、冷蔵庫一つ持たれへんねん。

りさ　　それはまだ一週間だから仕方がないでしょ。
芳雄　　俺にはこいつが一カ月やったところで出来るとは全然思えへんねんな。
りさ　　それは君が勝手に思ってることじゃん。
芳雄　　時間の無駄言うてんねん。
りさ　　しょうがないじゃん。男には出来ても女には出来ないことがあるんだから。
　　間
芳雄　　はぁ？
　　間
芳雄　　え？
　　間
りさ　　嘘……気がついてなかったの？
　　間
芳雄　　……何それ？
　　間
芳雄　　……え？お前、女なん？

　　遥が急に笑い出す。
　　だがすぐに笑えなくなって、

遥　　はぁ？何言ってんですか？男ですよ。
　　沈黙
芳雄　　……脱げ。今、ここで、脱げ。
遥　　……
芳雄　　お前、男なんやろ？だったら脱いでみろや！！
遥　　……
芳雄　　意味がわからん。マジで意味がわからん。お前、俺のこと騙したな？騙したんやな！！ああ！！？？

　　芳雄は遥に迫る。
　　必死で抑える守とりさ。

芳雄　　……通りで女々しいわけや。
遥　　……
芳雄　　（守に）おい。飯行くぞ。それ片しとけ。
守　　はい。

　　芳雄は下手へ去る。
　　守も冷蔵庫を持って下手へ去る。

りさ　　……私、みんな知ってるもんだと思ってたんだけど……男って気がつかないんだ？私なんて一発でわかったけど。なんかごめんね。
遥　　……いえ別に。
りさ　　でも不思議だったんだけど、なんでこんなところで働こうと思ったの？しんどいだけじゃん。配送やめてさ、コールセンターに入ったら？こっちも人足りてないんだよね。
遥　　（唐突に）それじゃあ意味ないんです！！
　　間
りさ　　……何？意味って。
遥　　……それはちょっと。
りさ　　ふーん。別にどうでもいいんだけどさ。
遥　　……
りさ　　というかトラックぶつけたの、君じゃなくて本当は芳雄君でしょ？違う？
遥　　……
りさ　　まぁこれまたどうでもいいんだけさ……よし。言っちゃおう……私、妊娠したんだ。

遥　　……そうですか。
りさ　　そこはさ、おめでとうございますって言おうよ。
遥　　……おめでとうございます。
りさ　　うわ。心こもってない……でもまぁそれぐらいが今の私にはちょうどいいかも。私もさ、おめでとうって感じじゃないんだよね。子供が出来たら純弥さん、変わるかなって思ったけど無理みたい……いや、凄い喜んでくれたんだよ。でもさ、なんかわかるんだよね。本当はそうでもないって事……結構、仲良いんだ。私たち。趣味も一緒だし、何考えてんのか、何を言おうとしてるのか、言う前から分かっちゃうし。だから結婚だってしてくれたんだろうし……これ、ちょっと自慢なんだけど私から言ったんだ「結婚して」って……

　　と言いながらタバコを取り出し、火をつけようとする。

遥　　タバコ、いいんですか？
りさ　　え？ああ……まじか。今日から禁煙……人生初なんだけど。

　　煙草を灰皿に丸ごと捨てる。

りさ　　私もお昼買ってこよ。

　　りさは下手へ去る。

　　遥は耐える。
　　しかし堪えきれない。
　　彼の頬をポロポロと涙が伝う。
　　悔しくて、悔しくて、悔しくて、堪らない。
　　子供のように涙を拭う。
　　鏡の前へ……
　　己の顔を見つめる遥……
　　なぜ俺はこんな身体で生まれてしまったのか……

　　時間が流れる……
　　他の従業員たちの心ない言葉が舞台上に響き、鏡の前に立ち竦む、遥の心をこれでもかと砕いていく……

　　お前は何でここにおんねん……

　　しっかり持てや！！

　　二週間やってそれか……

　　お前、よく見たら綺麗な顔してるやん？

　　これ終わったら遊ばへん？もちろんその格好で来るなよ？

　　三週間、経ったで？ええ加減、諦めろや。

　　あれ？……まだおったん？

　　もう一ヶ月？いすぎやって。迷惑やから。頼む、辞めてくれ……

　　遥、ついにその場に崩れ落ちてしまう……

●2018年8月
　20：30

　遥が入社してから一ヶ月後。
　純弥と拓次がいる。
　ベンチには緑色の小さな虫かごが置いてある。
　ラジカセからはFM局の音楽番組が流れている。

拓次　ドッペルゲンガー。
純弥　ドッペルゲンガー。
拓次　ドッペルゲンガーですよ。
純弥　何それ。
拓次　知りません？もう一人の自分。
純弥　知らん。
拓次　それ。他の人には言ったらダメですよ。バカにされます。「ドッペルゲンガー知らないなんて」ってバカにされます。
純弥　それがおったん。
拓次　いましたね。洛南イオンのミスド。ミスドって受付の横が調理場でこっちからも見えるんですよ。
純弥　そいつはお前に気がついてたん？
拓次　いえ、気がついてませんでした。ドーナツを焼くのに必死でしたね。
純弥　……三上博史そっくり？
拓次　……三上博史ではなかったけど、俺と瓜二つでした。俺、そいつのこと凝視しちゃって、本当は見ちゃいけないのに目が離せなくて、支払いにも手こずって。ドッペルゲンガーと目が合ったら死ぬんです。
純弥　なんで？
拓次　そりゃあこの世に同じ人間が二人いたら困るからじゃないですか。
純弥　……
拓次　ドッペルゲンガーには諸説あるんですけどよく言われているのが自分の欲望の物体化ですよね。支払い終わった後、求人募集の張り紙が目につきました。そうか……ドーナツ作る人生かと。俺がドーナツ作ったら泣きますか？
純弥　泣くか。
拓次　はは。ですよね。
純弥　……
拓次　おめでとうございます。
純弥　ん？何の事？
拓次　子供。
純弥　ああ……でももう発覚からだいぶ経ってるで。
拓次　何か言いそびれちゃって。
純弥　おおきに。
拓次　……どうですか。父親になる気分は。
純弥　……よくわからへん。
拓次　社長、凄い喜んでますね。
純弥　そうけ。
拓次　あなたは親孝行者だ。
純弥　……このカブトムシ、イオンで買ったん？
拓次　はい。
純弥　SFだけじゃなくてこんなのも好きなんや？
拓次　そういうわけじゃないんですけど、なんとなく可哀想かなと思って。逃がそうかと思ったんですけど、よく考えたらそいつ、今までエサも自分で探さずに生きてきたわけでしょ？いきなり外に出されても、路頭に迷うだけなんじゃないかって。まぁ動物園の哺乳類なら兎も角、虫はそんなことないのかな。
純弥　どうするんこれ。
拓次　誰かに引き取ってもらおうと思って、ずっとそこ置いてるんですけど、みんな興味ないみたいですね。持って帰ります？
純弥　俺はいいよ……そうや。こういうのはどうや？

　純弥は虫かごの蓋を外す。

純弥　……外に出て行くか行かないかはこいつに選ばせる。
拓次　なるほど……いいと思います。

そこへ下手より私服姿の遥が入ってくる。

拓次　おお。お疲れ。
遥　お疲れ様です。
拓次　今日は休みだろ？ゆっくり休めたか。
遥　はい。
拓次　じゃあ俺は帰りますね。
純弥　おお。

拓次は上手へ去る。

遥　……すいません。いきなり電話して。
純弥　かまへんよ。なんや。話って。
遥　……
純弥　大丈夫。今日は俺で最後。事務所には誰もおらへん。

遥は純弥を直視できずに俯く。

遥　……辞めさせて欲しいです。
沈黙
純弥　……お前、ここ来てどんだけなった？
遥　……一ヶ月です。
純弥　新人が一番辞める時期やな。
遥　やっぱり俺には無理でした……冷蔵庫一つ、まともに持たれへん……みんな、俺と組むの、嫌がります。
純弥　まぁそりゃあそうやろうな。でもそれは芳雄がみんなに言いふらす前からお前にもわかってたことちゃうの？それ込みで、お前、俺に「覚悟してきました」、そう言うたんちゃうの？
遥　……
純弥　いいか？腕の内側の筋肉っていうのは一番付き辛いねん。それは誰でもそう。お前はたまたま、みんなよりもっと付き辛いってだけ。でもそれは時間の問題や。多分お前はこの職場じゃあ人の二倍かかる。断言するわ。あと一ヶ月、耐えてみ？きっと持てるようになる。そしたら他の奴らの目も変わってくる。
遥　……
純弥　その間、俺がコンビ組んだってもいい。

純弥は鉄パイプにぶら下がる。
遥は顔を上げる。

純弥　（懸垂をしながら）これやったら誰にも迷惑かからへん。家傷つける心配もないし、先輩に怒られることもない。配送終わったら、必ずこれすんねん。配送で消耗しきった二の腕にさらに追い討ちをかける。懸垂はわかりやすいぞ。自分との勝負やから。向き合えば回数が少しずつ、少しずつ増えていく……！

純弥は手を離す。

遥　……なんでですか？
純弥　あ？
遥　……なんでそこまでしてくれるんですか？
純弥　……俺にはここしかあらへん。どこにも逃げられへん……でもお前は誰に言われるまでもなく自分の意志でここを選んだ……それがな、羨ましいねん。
遥　……

純弥　やってみ？
遥　……はい。

遥は鉄パイプに向かってジャンプする。
腕にありったけの力を込める。
しかし身体はなかなか持ち上がらない。
それでも遥は懸命に、不器用に、無様に、上へ、上へと己の身体を押し上げる。

初めての懸垂、一回。

彼の頭が鉄パイプにかかったところで、
暗転。

●2018年11月
12：30

3ヶ月後。
芳雄と拓次と守がベンチに座っている。

芳雄　全然わからへん。
拓次　本当に？坂本君は？
守　何となく。
芳雄　もう二次元の段階でわからん。
拓次　そうかぁ……ルンバの事考えてみて。お掃除ロボットのルンバ。ルンバってさ、階段降りれないし登れないんだよ。というかそもそも降りる登るという概念がないわけだ。平らな地面でしか動くことが出来ない。これはわかるよね？
芳雄　おお。
拓次　じゃあ芳雄君。ちょっと今からルンバの気持ちになってみて？
芳雄　ルンバの気持ち？
拓次　うん。
芳雄　掃除がだるいとかそういうこと？
拓次　いや、そういう意味じゃなくて上下の概念がないルンバの気持ち。
芳雄　……なった。
拓次　はい。そこでルンバの君に、仮に上からリンゴを落とすとするだろ？するとどうなる？
芳雄　どうなる？リンゴが落ちてくる。
拓次　ルンバの気持ち。ルンバの気持ち。上下がないんだよ？
芳雄　うーん？
守　あ。わかりました。突然、ルンバの前にリンゴが現れる。
拓次　……いいね！！
守　ありがとうございます。
芳雄　何俺を差し置いてわかってんねん。
拓次　これが二次元なんだよ。俺らはリンゴが落ちたってわかるけど、ルンバにはそれが理解できない。じゃどうして俺らにはリンゴが落ちることがわかるか？それは上下の概念があるからだ。縦横に高さを加えるとそれは三次元になる。で、そこに時間を加えると四次元になるって言われてるんだ。もし俺らが上下と同じように時間を理解したらどうなると思う？俺たちは過去現在未来に関係なく同時に存在する事が可能なわけ。
守　つまり宇宙人とは四次元的存在であると。
拓次　……いいね！！
守　ありがとうございます。
拓次　さらにいうと宇宙人は未来の俺らって可能性もある。もし未来の人間が時間の概念を理解出来るようになっていたら、この時代に現れることも可能だからな。
芳雄　やっぱり全然わからへんわ。ていうかもしその四次元っていうのがあったら何なん？何の役に立つん？

拓次　役には立たないかなぁ。でも夢があるだろ？過去にも未来にも存在できるんだよ？それってつまり過去を悔やまなくても済むし、未来を恐れずにも済むってことだよ。
芳雄　ふーん。
拓次　さて、じゃあ未来人でもなんでもない、今、現在を生きる俺らが四次元の存在になることは果たして可能だろうか？
守　無理じゃないですか？
拓次　ルンバが落ちてくるリンゴを理解できないように？いや、一個だけ方法がある……
　間
拓次　この、時間に縛られた身体を、手放すんだよ……
　間
拓次　まぁ全部、小説とかネットの受け売りなんだけどね。でも副社長にこの話したら結構食いついてたよ。
守　（四次元の話というより拓次という人物が）面白いです。
拓次　本当に？
守　はい。
拓次　そうか……最終日に分かり合えて良かったよ。

　事務所からお腹を大きくしたりさがアンケートハガキを持って出てくる。

拓次　お疲れ様です。
りさ　お疲れ様です。送別会の場所、予約出来ましたんで。
拓次　すいません。わざわざ。
りさ　欠席なしですよ。さすが。
拓次　みんな、俺がドーナツ焼くのをからかいたいだけですよ。

　拓次は立ち上がって、

拓次　休み時間のうちにロッカー、綺麗にしときます。

　拓次は事務所へ去る。
　りさはハガキを芳雄に渡す。

りさ　はいこれ。アンケートハガキ。さっき来たんだけど。
芳雄　お。珍しいやん。
りさ　ちょっと読んでみてよ。

　芳雄はハガキを読む。

芳雄　ほんまにこれ、俺らのことか？
りさ　配送員の名前、しっかり書いてあるじゃん。
芳雄　ほんまに嫌みな客やわ。
りさ　あのさ。何でそんなに悪ぶるの？少なくともお父さんが生きてた頃は、ここまで酷くなかったよね？
芳雄　うっさい。っていうかな。それ、俺じゃなくて坂本へのクレームやわ。
守　え。
芳雄　なぁお前やろ？
りさ　すぐに人のせいにするのやめなよ。
芳雄　え？お前やんな？
守　……はい！
芳雄　ほら。こいつのせいやって。

　上手より300リットルの巨大冷蔵庫を持った純弥と遥が現れる。
　明らかに遥の顔つきが精悍になっている。

純弥　　お疲れー。
りさ守　お疲れ様です。

　　芳雄だけ返事をしない。

純弥　　（遥に）落としなや？
遥　　落としませんって。
純弥　　ああ？

　　と言いながら二人は下手へ去る。

守　　……すげーな。あれ、見た目よりずっと重いやつです。
りさ　　絶対持たないと思ったけど。もう５ヶ月だし。アンケートも遥君の接客、評判いいもんね。
守　　俺のアンケート、どうでしたか？
りさ　　あるわけないじゃん。
守　　何がダメなんでしょうか？
りさ　　遥君に聞いてみたら？

　　りさは事務所へ去る。

芳雄　　お前さ、ほんまに凄い思てんの？俺やったら、あれ、一人で運べんで？
守　　え？あれをですか？
芳雄　　おお。何？無理やと思うん？
守　　いや、そういうわけじゃなくて。
芳雄　　お前はあいつのこと、どう思ってんの？おかしいと思うやんな？
守　　えっと……
芳雄　　言え。「おかしいやろ！！」ってあいつに言ったれ。
守　　……
芳雄　　言えよ。言わへんかったら殺すからな。

　　遥が戻ってくる。

遥　　坂本君、悪いんやけど手伝ってくれへん？
芳雄　　（守に）言え。
守　　……
芳雄　　言えや！！ああ？
守　　……おかしいと思います。
芳雄　　何が？
守　　えっと……
芳雄　　はっきり言えや。
守　　遥君が、ここで、働く事が。
芳雄　　（遥に）やって？俺もそう思うわ。
　　沈黙
遥　　芳雄さんって社長の息子ってだけでぶっちゃけ何の権限もないですよね？そんなに俺がここで働くのが嫌なら社長か副社長にお願いしたらどうですか？もしあの二人に辞めろって言われたら、俺、辞めます。でも芳雄さんに言われたところで「だったら何？」ってのが正直なところです。
芳雄　　お前、調子乗んなよ？俺は認めへんぞ。

　　芳雄は遥に掴みかかる。

遥　　あなたに認めてもらわなくて結構です！！

純弥が下手より戻ってくる。

純弥　何してんねん！！

と芳雄の手を振り解く。

芳雄　ヒューヒュー！！（遥に）お前、やっぱりお姫様やん！！良かったな。王子様が現れてよぉ。
純弥　芳雄、お前に言っておきたい事がある。
芳雄　またおもんない説教か！？
純弥　ええから聞け！！……もう遥に関わるのはやめろ。
芳雄　はぁ？俺はこいつが仕事出来ひんから言うたってんねん。
純弥　こいつはこいつなりにやっとる。
芳雄　俺だけちゃうぞ？他の奴らもこいつには迷惑しとんねん。こいつを見てるだけでイライラすんねん！！
純弥　……お前、悔しいんやろ？遥がお前の思い通りにならへんから。
芳雄　……こいつ、お前にそっくりやわ。よかったな？同類の可愛い可愛い後輩が出来てよぉ。お前、親父が死んでから随分と喋るようになったな？ここを守らなあかんって気張ってんねんやろ？無理やって！！お前には。こんな奴を置こうとしてる段階で絶対、無理。いつからここはそんなひ弱な会社になったんや？
純弥　そんなにここが気に入らんなら、もうここで働かなくてもいいぞ。
間
芳雄　……そんなん、お母ちゃんが許すはずないやろ？
純弥　俺から言うとくわ。それから社長はお前と違って遥のこと、認めてるしな？
芳雄　……

思わず泣きそうになる芳雄。
上手へ去る。

純弥　おい。

芳雄を追って純弥も上手へ。

守　……辞めてくれたええのに……てか辞めへんやろうなぁ。というか俺がここ、辞めたろうかな？どう思う？あんな人の相手してたら持たへんっていうか。俺は君と違って特に副社長に気に入られてるわけちゃうし……最初は流してたらええって思ってたけど、流石に毎日毎日これやと俺だってしんどいっていうか……俺、いま、毎朝、お腹壊しててさぁ。来る前に必ずそこのファミマのトイレ、行くねんか。でも何でコンビニのトイレっていっつも誰か入ってるんやろ？絶対、誰かが俺の前に入ってて、なっかなか出てこないねん……さっきのはあれやねん。そう言わへんかったら殺すぞ！！って言われて仕方なく……すぐあの人、殺すっていうやろ？口だけってのはわかってるけど、でも殺すって言われると俺だって言わざるを得ないっていうか。っていうか殺すって凄い言葉やん？
遥　坂本君ってさ、自分が男であることをどう思ってんの？当たり前やと思ってる？
守　そんなん、考えたこともないよ。
遥　せやろ。それって凄い恵まれてることやと思わへん？俺は坂本君の事、ずるいって思うわ。だってそもそもの前提が違うねんから。君は芳雄さんに言われたから仕方なくって言うけど、もし君が俺と同じ立場やったら絶対、仕方なくなんて思わへんと思う。
守　……
遥　もっと自分の言葉に責任を持った方がいいよ！！それから辞めたいなら辞めたらええやん？俺に聞かんといてよ。でも俺からしたら、辞める前にできる事、坂本君にはいっぱいあると思うけど？

守はその場にいる事が恥ずかしくて堪らなくなる。
守は下手へ去る。
純弥が上手より戻ってくる。

純弥　お前は何も気にせんでいいからな。
遥　俺は全然。慣れてますから。

純弥　　昔からああいうやつやねん。自分より弱いって決めつけたら徹底的に攻撃せな気が済まへん。
遥　　俺、弱くないですよ。
純弥　　……ああ。
遥　　でも俺、芳雄さんに色々な目に合わされてきたけど、実はそんなに嫌いじゃないんですよね。あの人も結局は俺と同じなんだって考えたら。
純弥　　全然違うやろ。
遥　　認めてもらいたいんですよ。あなたに。
純弥　　……
遥　　拓次さん、今日で最後ですね。送別会、王将だって。もうちょっといいとこ選べばいいのに。
純弥　　あいつ、餃子、好きやねん。
遥　　俺も拓次さんみたいに沢山の人から愛されてみたいですねー。どんな気持ちがするんでしょう。
純弥　　……
遥　　寂しくなりますね。
純弥　　おお。
遥　　落ち込んでますか？
純弥　　いや、ホッとしてる……
遥　　もし、副社長が落ち込む事があったら、今度からは俺が慰めます。
純弥　　一応、俺、お前の上司やねんけど。
遥　　そんなん、関係ないです。
純弥　　……なかなか懸垂みたいにはうまくいかへんなぁ。色んなものを背負えば背負うほどキツくなって、でも手放したら手放したらで、それもキツイ。
遥　　それは副社長だけじゃないですよ。俺だって同じです……うちの母親、俺が今、こんなんなってるって全然知らないんですよ。結局、言えへんくて。めちゃくちゃいい子で通してきましから。
純弥　　……連絡は取ってんのか？
遥　　一応。こっちからはないですけど、電話がかかってきたら出てしまう。心配かけたくないって。情けない事に母親の前では男でいれないんです。
純弥　　……ほんならここに来てもらったらどうや？
遥　　え。
純弥　　お前が働いてる姿、見せるんよ。電話じゃ言えへん事も、身体でだったら示せるんちゃうか？
遥　　……考えておきます。
純弥　　あかんて。考えても考えても答えは出ーへんぞ。
遥　　……
純弥　　手、出して。

　純弥は遥の右手を叩く。
　純弥もう一度下から手を叩く。

純弥　　最後はグー。

　遥と純弥はお互いの拳をコツンとぶつける。

純弥　　お母さんに、今のお前を見せること。男同士の約束。
遥　　……
純弥　　もう一回。

　二人は先ほどよりスムーズにもう一度、手を叩きあう。

純弥　　もしそれが出来たら、お前のいう事、なんでも聞いたるわ。ラスト。

　さらにもう一度手を叩きあう。

遥　　……男同士の、約束。

純弥　　（笑って）おお。

　生まれた時から男性性を疑った事がない人間にとって「男の約束」は極めてステレオタイプなものに映るかもしれない。しかしステレオタイプすら手に入れなかった遥にとって「男の約束」ほど憧れたものはやはりなかった。

●2018年11月
　20：30

　その日の夜。
　空には三日月。
　京子と拓次がリハビリ用のキャッチボールをしている。

拓次　　ゆうた。
京子　　たける。
拓次　　しんいち。
京子　　三文字がいい言うたやん？
拓次　　じゃあ……のぼる。
京子　　んーどれもしっくりけーへんなぁ。
拓次　　お二人の時はどうやって決めたんですか？
京子　　純弥と芳雄？あれはお父さんがつけてん。産むのはウチやのに私には何がいいとも聞いてさえくれんかった。
拓次　　そうなんですね。まぁまだ予定日まで時間ありますし。焦って決めなくてもいいじゃないですか？
京子　　あーどうしてこうも男の子ばっかりなんやろ。
拓次　　不思議ですよね。世界中の男女の比率ってほぼほぼ半々なんでしょ？別に年ごとにどっちかが極端に多かったり少なかったりしてもいいはずなのに。
京子　　あかん。全然男の子は名前がないな。女の子やったらパッて思い付くのに。
拓次　　りささんは何て？
京子　　まだ考え中やって。
拓次　　子供かぁ。想像もつきませんね。
京子　　あんたにはそういうのないん？
拓次　　ないですねー。でもたまに考えます。やっぱり俺の年代にもなるとほとんどのやつが子持ちですからね。
京子　　もし出来たら、必ず見せに来てな？
拓次　　はい。お土産はもちろんドーナツで。

　二人は笑う。

京子　　ほんまに辞めるん？
拓次　　辞めます。
京子　　今ならまだ間に合うで？辞めるのやめまーすって。
拓次　　いやーもう無理でしょ？送別会はすでに進行中ですし。
京子　　今、みんな、王将でうちらの事、噂してるかな？
拓次　　噂？
京子　　二人で抜け出してどこ行ったんやって。
拓次　　あー。
京子　　あんたに車椅子押してもらって散歩するん、ほんまに楽しかったんやけど。今日で最後って泣けてくるな。
拓次　　大丈夫です。もっと楽しいことはありますから。

　そこへ上手より純弥が入ってくる。

純弥　　やっぱりここか。
京子　　純弥。今、ええとこやねんから邪魔せんといて。
純弥　　あ？
京子　　今、どんな感じ？

純弥　　二人とも、どこ行ったんやって大騒ぎやわ。
京子　　ほら。言った通りやろ？じゃあうちは戻るわ。一人で大丈夫やからな。これ（初心者用マーク）もあるし。戻ってくるやろ？
拓次　　はい。

　　京子は上手へ。
　　ふと三日月が目に入る。

京子　　……あ。（純弥に振り返って）チビちゃんの名前やねんけど、ひかるっていうのはどうやろ？
純弥　　……ひかる。
京子　　うん。
純弥　　……ええかもな。

　　京子は上手へ去る。

拓次　　……静に引っ越すことにしました。
純弥　　静？
拓次　　いい一軒家、見つけたんですよ。
純弥　　随分、辺鄙なとこに住むんやな。
拓次　　覚えてます？静の猫屋敷のおばあちゃん、実はずっと気になってて。休みの日に気が向いたら顔出してたんです。まぁちょっとボケちゃてって。どうも俺のこと、息子だと勘違いしてるみたいなんですよ。
純弥　　お前が世話してるん？
拓次　　そんな大それたことは出来ないですけど。
純弥　　……お前らしいな。
拓次　　何ですか？お前らしいって。
純弥　　わかるやん？
拓次　　自分じゃわかりませんよ。
純弥　　……
拓次　　遥君、来ました？
純弥　　いや、電話しても出ーへん。一度家帰ってからくるとは言ってたんやけど。
拓次　　それって坂本君が関係してるんですかね？
純弥　　え？
拓次　　酒飲みながらずっと落ち込んでましたよ。
純弥　　何も聞いてへんけど。
拓次　　そうですか……俺も最後に会いたかったなぁ。
純弥　　（飲み屋に）戻ろか。
拓次　　いや、もうこれで。
純弥　　え。
拓次　　十分良くしてもらいました。
純弥　　花残ってんで？
拓次　　副社長の家に飾っといてください。
純弥　　せやけど。
拓次　　今までありがとうございました。楽しかったです。
純弥　　……俺のせいか？俺のせいで辞めるんか？
拓次　　違いますよ。全部自分で決めたことです。
純弥　　……
拓次　　あなたはここの副社長で、あと三ヶ月もしたら一人の父親です。それなりの責任ってものがある……でももし本当にキツくなったら静に来たらいい。
純弥　　……
拓次　　みんなに宜しくです。お疲れ様でした。

　　拓次は上手へ去る。

見送るしかない純弥。
ベンチに座る。
タバコに火を点ける。
携帯電話が鳴る。

純弥　もしもし。遥。お前、今どこおるん？……あ？……すいません。これ、緑川の電話ですよね……警察？……はい……はい……はい……はい……

そこへ遥が下手から入ってくる。
遥を見る純弥。
純弥は笑いを堪えきれないと言った様子で、

純弥　はい……はい…はい…ちょっと待ってくださいね？（遥に）お前、どこ行ってたん？拓次が待ってたぞ。まだその辺におるはずやし……お前、携帯落としたやろ？なんか拾ったやつが無茶苦茶言ってんねんけど。（電話に戻って）すいません。で、なんでしたっけ？……はい……はい……あの、バレてるで？いい加減にしぃや？あんたが死んだ言うてる緑川なら今、ここにおるから……
遥　……

純弥の表情が次第に歪み始める。
携帯電話をゆっくりと下ろす。
すると遥は突然、第四の壁（四次元）を破り、客席側を上手から下手へゆっくりと睨み始める。

遥　8ヶ月後。

○2019年7月
20：55

純弥と昌美がいる。
椅子には遥が座っているがもちろん昌美には見えていない。
（これ以降、彼がこの場所を離れることはない）

昌美　……あの、坂本君のこと、守ってあげていただけませんか？お願いします。あの子、このままだと壊れちゃいますよ？
純弥　……俺には無理なんです。何かを守ったりする事は。
昌美　副社長になら出来ますよ。
純弥　あなたに俺の何がわかるっていうんです？
昌美　……

今しかない……
そう思った昌美はベンチから立ち上がる。

昌美　……ここにいるとね、色んな事がわかるんです。あ、わかるっていうのは嘘かな。わかるっていうか、わかった気になれるっていうか。例えば、そうですね……

と昌美はベンチを見て、

昌美　ここに座ってたのかなぁ、とか。

鏡の前へ。

昌美　ここで顔を洗ったのかなぁ、とか。

正面を向いて、

昌美　汗をかきながらせっせと家電を運んでたのかなぁとか。

純弥に向き直って、

昌美　……駄目ですね。どうしても言いたい事が言えない……言おうとするとぐるぐる回って結局何が言いたかったのかわからなくなっちゃう。そのくせ相手には伝えたい事をわかってほしくて……何度も何度もイメージしてきました。副社長と二人きりになったら、こうやってこうやってこう言おうって。でも全然イメージ通りにいきませんね。こう、ふらっと言えたらいいんですけど。ふらっと……まどっろっこしいですよね？
純弥　……はい。

なぜかお互い笑ってしまう二人。

昌美　働いてたんです。うちの子……緑川遥（はるか）。ご存知ですよね？

● 2019年7月
12：30

昌美がベンチに座っている。
タバコに火をつける。
事務所からりさが現れる（すでにひかるを出産しているため、お腹は大きくない）。

りさ　お疲れ様です。
昌美　お疲れ様です。
りさ　めちゃめちゃ暑いですね。
昌美　最高気温、３５度まで上がるらしいですよ。
りさ　えー。ちょっとマジで勘弁です。あの子、抱っこするとメチャクチャ熱いんですよ。
昌美　赤ん坊なんてみんなそうですよ。寝てくれました？
りさ　何とか。
昌美　ご苦労様です。
りさ　背中にセンサーついてるんですよあの子。抱っこしてたら大丈夫なのに置いた瞬間、わーんって。特に酷いのがお風呂です。暴れて暴れてもうギャン泣き。
昌美　お風呂入れる方が自信ないと赤ちゃんにもわかるんですよ。
りさ　やっぱり？膝の上でなんとか洗おうとするんですけど私、足短いからツルツルツルツル滑って暴れて滑って。こればっかりは社長にお願いも出来ないし。
昌美　私もそうでした。でもうちらの頃は、まだ産婆さんって人がおって、今もおるんかな？その人に毎晩来てもらってたんよ。
りさ　へー。
昌美　やっぱり違うんですよ。物凄く気持ち良さそうにフゥゥって。
りさ　私も産婆さんにお願いしようかな。
昌美　良かったら今度、私にやらしてくれません？
りさ　え？いいんですか？そりゃあ武田さんがいいなら。
昌美　だって乳児のお風呂なんてどんだけぶりよ。なんか懐かしいなぁって思って。
りさ　是非是非。

りさはタバコに火をつける。

昌美　ほどほどにしといたほうがいいですよ。社長のあれ（脳血栓）、絶対タバコだと思います。
りさ　武田さんが言いますそれ？
昌美　いいんですうちは。いつ死んだって。
りさ　そんな事、社長も言ってましたよ。

昌美　　そう？
りさ　　……不思議ですよね。妊娠中は一切、吸いたくなかったのに、あの子、産んだ途端に復活。もしこれで母乳が出てたら駄目だけど出ないからまぁいいでしょ。
昌美　　良くはないと思うけど。
りさ　　そこはいいって言ってくださいよ。もう夜泣きがキツくてそれなりにストレス抱えてるんですから。
昌美　　今はストレスかもやけど、１０年経ったらその時間も愛しくなるんよ？
りさ　　おーさすが先輩ママ。
昌美　　だってもし、うちの子を産み直せるならそうしたいですもん。
りさ　　武田さんって超安産だったんすか？
昌美　　ううん。超難産。
りさ　　じゃあそれってあの痛みをもう一度って事？
昌美　　……やっぱり嫌かも。

　二人は笑う。

りさ　　そういえば昌美さんのお子さんって今、おいくつなんですか？
昌美　　えっと２７、かな？
りさ　　男の子？女の子？
昌美　　……女の子です。

　するとそこへ京子が上手から入ってくる。

昌美　　お疲れ様です。
りさ　　どうでした？ハローワーク。
京子　　全然あかん。一人も応募ないって。
りさ　　そうですか。
京子　　タウンワークからもあらへんし。広告費もバカにならんしなぁ。
りさ　　なんで配送は集まらないんですかね。
京子　　武田さんはハローワークからやったっけ？
昌美　　はい。
京子　　もう半年ぐらい経ったん？
昌美　　まさか。たったの2ヶ月です。
京子　　え。そうかぁ。わかった。もうここの社長は武田さんでええと思うねん。
昌美　　ええ？何をおっしゃいます。
京子　　この子（りさ）とも話しててん。こんな出来る人はおらんって。
りさ　　そうそう。
京子　　りさ。ほんでちょっと話したい事あるねん。

　事務所から赤ん坊の泣き声。

りさ　　あーもうさっき寝たばっかりじゃん。
昌美　　あの、私、見ときますよ。
りさ　　え？でも。
昌美　　お話、あるんでしょ？赤ちゃんが泣いてたら難しいでしょうし。
りさ　　ああ……
昌美　　任せてください。
京子　　おおきに。

　昌美は事務所へ去る。

りさ　　なんですか？話って。
京子　　その事やねんけどな。派遣社員、増やす事にした。

りさ　　え？
京子　　しゃーないやろ。
りさ　　何人？
京子　　５人。
りさ　　結構ですね。
京子　　この半年でほとんどのアルバイト全滅やろ。入っては辞めて入っては辞めて。
りさ　　……社長、ちょっと私からの提案なんですけど、みんなの勤務日数、せめて週５にしません？
京子　　勿論、そうしたいのは山々やで。でもなぁ……
りさ　　あとね、芳雄君と一緒にはモノになるまでトラックに乗せない。
京子　　じゃあ誰が教育すんのよ？
りさ　　それはベテランの契約社員に。
京子　　ここは神崎家の会社やで？
りさ　　でもやっぱり芳雄さんとやるのは新人、相当キツイと思います。トラックって基本２人じゃないですか。まぁ時々３人の時もあるけど。こうずっと一対一なわけでしょ？で、現場、終わったら先輩からの指導、で、現場、指導、現場でしょ？普通の職場と違って逃場がないじゃないですか？特に芳雄君だとここの人間って事もあるから余計だし、ぶっちゃけ芳雄君、あれは指導っていうよりほとんど恫喝っていうか、はたから見たらただのイジメですよ。
京子　　言いたいことはわかるけど、それでも今までやってこれたやんか？
りさ　　それはね。社長がいくら甘やかもしても、純弥さんが芳雄君の事、ちゃんと見張ってたからですよ。
京子　　……
りさ　　社長だって気がついてるでしょ？純弥さん。拓次さんと遥君が辞めてから変だって。
京子　　気のせいやって。
りさ　　社長が見て見ぬふりしてどうするんですか？

　　そこへ純弥が下手より現れる。
　　りさは純弥と目を合わそうとするが、純弥は見ようとしない。

京子　　おかえり。
りさ　　（純弥を意識しながら）ちょっとトイレ、行ってきます。

　　りさは下手へ去る。
　　純弥は煙草に火を付ける。

京子　　芳雄のことやけど。
純弥　　……ああ。
京子　　最近、目に余るってあの子（りさ）が。
純弥　　……おお。
京子　　色んな子が辞めて落ち込むのはわかるけど、そろそろしっかりして欲しい。
純弥　　……
京子　　純弥、うちの話、聞いてるか？
純弥　　ヤマダ電機、別の配送業者に乗り換えるって……重要な話やからって言うからエリヤ増やしてくれんのかと思たけどちゃうかった……女社長のここにはもう任せられへんってさ……これからどないしよ。ジョーシンも早々に契約打ち切られてまうし。うちらはヤマダで持ってたようなもんやからな……
京子　　……何それ。

　　京子は上手へ。

純弥　　どこ行くん？

　　と車椅子を掴む。

京子　　あんたこのまま引き下がるつもりか。
純弥　　もう決定やねん。

京子　　うちも舐められたもんやわ。あんたが言われへんねんやったらうちが言ったる！！車で運びなさい！！
純弥　　元々、大手の下請けに任せたかったんよ。女社長云々は建前や。
京子　　あんたにこの悔しさはわからへん！！

　　そこへ下手よりりさが戻ってくる。
　　顔を合わせたくない純弥は事務所へ去ろうとする。

りさ　　なんでですか？なんで私と目、合わせてくれないんですか？それからひかるの事ですけど、ちょっとは見てくれたっていいじゃないですか？

　　純弥は事務所へ去る。

りさ　　無視か。
京子　　ちゃうねん。今、色々あの子にもあって……堪忍したって。
りさ　　色々あったら、逆に目を合わせていくのが夫婦だと思うんですけど。
京子　　……
りさ　　（ニコニコしながら）離婚しようかな？
京子　　ちょっと！！
りさ　　嘘ですよ。言ってみたかっただけです。驚きすぎですよ。
京子　　言っていいことと悪いことがある！！
りさ　　本当に嘘ですから。するわけないじゃないですか。私にだって意地がありますから。（わざわざ事務所に向かって大きな声で）向こうから別れてくれって言ってきても、私、絶対に別れませんから！！

　　そこへ上手より芳雄が帰ってくる。

りさ　　おかえり。
芳雄　　おお。
りさ　　あれ？一人？坂本君は？
芳雄　　あーもうあかん。全然使えへんわあいつ。そのくせ、泣き虫やねんか？ちょっと言うたらトラックで泣き出してもうて。前もおったやん。重いもん、運ばれへんくせに純弥に気に入られて調子乗っとたやつ。坂本も前と同じで何も言わずに飛ぶ（辞める）で。
りさ　　坂本君のこと、育てるって豪語してたじゃん。
芳雄　　もう辞めた。
りさ　　え？
芳雄　　あいつも俺のこと裏切りよった。絶対許さへんねん。
りさ　　今、どこにいるの？トラック？
芳雄　　ううん。逃げた。
りさ　　逃げた？
芳雄　　おお。セブンで休憩しとったら戻ってこんくて。
りさ　　なんで事務所に電話しないのよ？
芳雄　　どうでもええやん。
京子　　……芳雄。あんたそれ、逃げたんちゃうくて、置いてきたんちゃうの？
芳雄　　……
京子　　早く戻りなさい。
芳雄　　はぁ？今から休憩。
京子　　そんなん後にしぃ！！
芳雄　　母ちゃん、何怒ってんのよ？
京子　　あんたはこの会社、潰す気か！！もうお父さんがおった時とは違うんやで！！あんたもこの家の人間ってことを自覚して仕事しぃ！！
芳雄　　車椅子で怒っても迫力ないで？
りさ　　芳雄君！！
芳雄　　はいはい。行きますよ。行けばええんやろ？でもあんなん、ものになる訳ないやん！？

　　芳雄は上手へ去る。

京子　　……押してくれる？純弥と落ち着いて話しせなあかん。
りさ　　はい。

　　京子は俯く。

りさ　　社長？
京子　　（声にならない頷き）。

　　りさと京子は事務所へ去る。
　　事務所から、

りさの声　　武田さん。ありがとうございました。もう大丈夫なんで。（抱っこ）代わります。一回、お昼、休憩とって下さいね。
昌美の声　　はい。あ、じゃあ財布だけ。

　　しばらくすると昌美が事務所から出てくる。
　　客席に背中を向けて事務所を眺める。
　　昌美は宙に漢字を書く。

昌美　　（小さな声で）のびのびと、おおらかな子になりますように……これで……遥（はるか）……

　　純弥が事務所から勢いよく飛び出してくる。
　　後ろにはりさ。

りさ　　ちょっと純弥さん！！
純弥　　アホか！！救急車なんか待ってられるか！！
りさ　　トラックなんかのどこに乗せんのよ！？

　　純弥は上手へ去る。

りさ　　もう！！
昌美　　どうしたんですか？
りさ　　……社長が、急に、車椅子で、動かへんようなって……

　　りさは事務所へ去る。
　　立ちすくむ昌美。

○2019年7月
　21：00

昌美　　働いてたんです。うちの子……緑川遥（はるか）。ご存知ですよね？
純弥　　……
昌美　　すいません。黙ってまして。
純弥　　どうして。
昌美　　それは……

　　純弥は深々と頭を下げる。
　　そして声を震わせながら、

純弥　……申し訳、ありませんでした。
昌美　……やっぱり。
純弥　……
昌美　ここは想像通りでした。
純弥　……
昌美　違うんです。そんなことをしてもらいたいわけじゃないんです。
純弥　……
昌美　お願いします。顔、あげてください。

守が事務所から現れる。

昌美　言っちゃった……
守　ああ……
昌美　もう引き返せへんね。
守　……
昌美　ちょっと待っててください。

昌美は事務所へ去る。

守　……遥君。急に来なくなったじゃないですか？みんなはやっぱり飛んだって言ってたけど、俺は遥君に限ってそんな事ないって……それで事務所からみんなおらへん時に履歴書盗み出して、行ったんです。遥君のアパート。そしたら武田さんが遺品整理してはって……俺ね。あの日、遥君にひどい事言ったんです。絶対謝らなあかん絶対謝らなあかんって思ってたんですけど……俺、一生謝れへんくなってしまってどうしたらええかわからんくなって……俺、今まで、何かをやり通した事って一回もないんですよ。遥君は俺に言ってました。お前にはまだやれることがあるやろ？って……俺、本当は毎日毎日ここから逃げ出したくて、でもここで逃げたら絶対、遥君に顔向け出来んのもわかってて……だからね。武田さんに見張ってもらおうと思ったんです。すごい似てるんですよ。遥君と武田さんの目。あの目があれば、なんだって耐えられる、そんな気がするんです……
純弥　……お前、耐えれてないやん。
守　はい。やっぱり無理かもです……

昌美が日記帳を持って戻ってくる。

純弥　……ここ、畳むことにした。もう限界や。

守は純弥に掴みかかる。

守　……何言ってんすか！？俺の話聞いてなかったんすか！？ここで一人前にならへんと俺は救われないんすよ！！どんだけクソ兄弟やねん！！あんたも芳雄も！！お前、兄貴なんやったら、ちゃんと言うたれや！！あのクソEXILE！！あいつ、毎日毎日、遥君の悪口言いやがって！！下手に出りゃつけあがって！！今日、やっと言うてやったんです！！お前なんかより遥君はよっぽど男らしいって！！……辞めへん！！俺は絶対に辞めへんからな！！

守は上手へ去る。
純弥は昌美に告白を始める。

純弥　……俺のせいなんです。俺、知ってました。あいつ、メチャクチャに身体、酷使してたこと……でも止めたくなかった。笑うんですよあいつ。ちょっとずつ何か出来るようになる度に……俺はずっとそれを見ていたかった……でも間違いやった。俺はさっさとお前には無理やってあいつに言うべきやったんです。
昌美　……これ、あの子の日記です。ずっとカバンに入れて出勤してました。

昌美は自ら純弥の手を取って日記を渡す。

昌美　　……警察で見ました。排水溝で青白い顔をして身体を曲げてる写真。自転車から転げ落ちて、頭を打って死んだって……副社長、こんなにもあっけなく死んだあの子の事を不幸やと思いますか？
純弥　　……
昌美　　私は不幸やと思ってました……アパートでその日記を見つけたんです……そこには毎日毎日、死にたい、死にたいって書いてありました。いくつもの自殺の方法が書かれてました。本当にあの子が書いたんかっていうぐらいの酷い言葉がこれでもかって書き殴られてました。でもね……あの子が亡くなる３ヶ月前から日記の雰囲気と言葉がガラリと変わってたんです。そこには副社長への想いが溢れてました。初めて自分の居場所を見つけた気がする。初めて自分をまっすぐに見てくれる人に出会えたって……だから私、こう思うことにしたんです。
遥　　俺は不幸なんかじゃありません。俺は幸せの絶頂で死んだんです。
昌美　　（遥と同時に声に出さずに）あの子は不幸なんかじゃありません。あの子は幸せの絶頂で死んだんです。
純弥　　……
昌美　　言えました。ずっと言いたかった事。最初から最後まで。イメージ通りです。
純弥　　……

　昌美は上手へ。

純弥　　……あの……あいつのこと、遥（はるか）っていうの、やめていただけませんか？あいつは遥（はるか）やなくて、遥（りょう）です。
昌美　　……私にとっては遥（はるか）ですから。

　昌美は上手へ去る。
　純弥は日記帳を見つめている。
　りさが上手より入ってきてベンチに座る。

りさ　　トラックの荷台で、芳雄君、泣いてましたよ……純弥さんも芳雄君もどんだけマザコンなんだよ！？
純弥　　……
りさ　　驚きました。坂本君、芳雄君の事、慰めてて。あの二人、何か、あったんですか？
純弥　　……
りさ　　……社長、目、覚ましました。意識もはっきりしてます。
純弥　　……そうか。
りさ　　何、私一人病院において逃げてんですか？
純弥　　……すまん。

　りさは立ち上がる。

りさ　　……純弥さん、お願いがあるんですけど。えっとこれからうちらのどっちかが先に死ぬまで、絶対に目をそらさないでください。

　りさは背中を向ける純弥の腕を掴み、自分に向き合わせる。

りさ　　私が何か言いたい時は、ちゃんと私に目、合わせてください。もうそれ以上の事は望まないし。もし一度でも目をそらしたら、私、ひかるを連れてここ、出て行きますから。嘘じゃないですよ。私、本気です。

　赤ん坊が泣き出す。
　りさは事務所へ。

純弥　　りさ。
りさ　　……はい。
純弥　　ひかるの事やけど。
りさ　　……はい。
純弥　　今度からは俺も面倒みるから。
りさ　　……言い方間違ってる！！

純弥　……俺にも面倒、見させて下さい。
りさ　……最初からそう言えよ。

りさは事務所へ去る。
ベンチに座る純弥。
遥が隣に座る。

遥　男同士の約束。あと少しだったんですけどねー。電話はしたけど、見せれへんくて……約束、果たせませんでした。
純弥　……手、出して。

二人は手を叩きあう。

純弥　何して欲しい？

二人は手を叩き合う。

遥　え？だって…

二人は手を叩きあう。

純弥　何でも言う事聞く言うたやろ？
遥　……本当に？
純弥　おお。

遥はベンチから立ち上がる。

遥　……幸せの絶頂より上ってあると思います？
純弥　……
遥　俺はあると思ってます。幸せの最絶頂。
純弥　……
遥　腹痛が痛いみたいで超だせぇ……一個だけ日記にも書いてなかった事があるんです……俺、一度でいいから誰かに抱き締めて欲しかった。
純弥　……
遥　鎧を脱いでみたかったんです。
純弥　……

遥は作業服に手をかける。
しかし躊躇って、

遥　……（声を震わせて）やっぱり出来ひん。
純弥　……大丈夫や。お前は、緑川、遥（りょう）やろ？

遥は己の身体の奥で蹲る、本当の男としての自分自身を純弥が見てくれている……その事をはっきりと感じ取る。
生温い風が吹く。
ゆっくりと空を覆っていた雲が流れていく……
満月が、現れる。
意を決した遥は作業着をゆっくりと脱いでいく……
サラシを巻いた遥の体が露わになる……
彼の美しく、逞しい背中が、月の光に照らされて……

暗転。

☆

ギーガシャン、ギーガシャン……

やがてその音が単音に変化していく……

ギーガシャン、ギーガシャン、ギーガシャン、ギーガシャン……ピ、ピ、ピ、ピー、ピ、ピ、ピ、ピ……

☆

●2049年7月(※1)
13：00

30年後。
病室。
カーテンが微かに揺れている。
下手より男（拓次に似ている）が入ってくる。
男はサイドテーブルに持ってきた虫かごを置き、蓋を開ける。
男は椅子に座り、ベッドで眠る純弥を見つめる。

男　　初めまして……なかなか来れずにすいません……ひかるは見てられないって外にいます……３０にもなって弱虫なんですよ。
純弥　……
男　　凄い、外、暑いです。
純弥　……
男　　そこの公園にね。クヌギの木があるんです。ご存知ですか？
純弥　……
男　　捕まえてきました。カブトムシ。
純弥　……
男　　お義父さん、ひかると結婚しようと思ってます。
純弥　……
男　　……許して、いただけますか？

虫かごの中のカブトムシが、羽を広げて……

終わり

参考文献：
『スローターハウス５』（カート・ヴォガネット・ジュニア著）
(※1)夢か現かわからないラストシーンのみ、病室へと変わる構成は『スローターハウス５』からの引用。